375.9
Y019
資料室

五訂 近世近古國文要抄 全

42617
教科書文庫
4
810
51-1930
20000
36274

文部省檢定濟

昭和五年八月十三日　師範學校並中學校國語科用

五訂 近世近古國文要抄 全

吉澤義則編

資料室

375.9
Y019

四月
岡田照子

廣島大學圖書之印

広島大学
教
36274
図書

本居宣長

凡例

一、本書は曩に大正十一年改修せる近世近古國文要抄を更に改訂したるものにして、中等諸學校の上級用副讀本、もしくば補習科用讀本として編纂したるものなり。

一、現今中等學校に於ては副讀本として諸種の抄本を採用せるも、教授時數に制限せられて一方に偏するを免れず。本書は特にこの點に留意し、短時間を以て近世・近古に亘る國文の概要に通ぜしめんことを期せり。

一、近世文は樂訓・文訓・駿臺雜話・玉勝間・琴後集・藤簍冊子・閑田耕筆・花月草紙・櫃園文集の外、新に年々隨筆を加へ、その代表的文章を抄出して前篇となし、近古文は神皇正統記・十訓抄・方丈記・太平記・東關紀行・增鏡より抄錄して後篇となせり。近古文中には平家物語・徒然草等をも採錄すべきなれども、それらは補助教科書として多く單行使用せらるゝを以て、本書にはこれを除けり。

一、各抄配列の順序は必ずしも該書の製作年代を追はず、一書中の各節も原本の次第に從はざるものあるは、聊か詞章の難易と學習者の程度とを顧慮したるなり。時に原文の字句を取捨改竄せるも亦教課の目的に副はしめんが爲なり。

一、各書の解題は各抄の初に簡略に附記せり。頭註と共に教授上の便宜ともならんか。

一、改修版には一文中の一部の抄錄せるもの多く、從つて前後の關係を知るに不便なるのみならず、興味を殺ぐこと亦尠からざりしを以て、本書にはたとひ長文のものにても、成るべく其の全文を採錄するにつとめたり。又頭註も改修版に比して遙に其の數を增加せり。これ本書改訂の重なる點なりとす。

一、本書改訂に當りて、平田篤胤の玉襷中より數章を採用したり。

昭和四年十月五訂に際して

編者識

目次

樂訓・文訓　貝原益軒　一
駿臺雜話　室鳩巢　二
花月草紙　松平定信　三
玉勝間　本居宣長　元
琴後集　村田春海　空
年々隨筆　石原正明　充
藤簍册子　上田秋成　公
閑田耕筆　伴蒿蹊　卆
泊洒舍集　清水濱臣　九

檀園文集	中島廣足	一〇三
玉襷	平田篤胤	一二五
神皇正統記	北畠親房	一三五
十訓抄	作者不詳	一三七
方丈記	鴨長明	一四七
東關紀行	源親行	一六一
太平記	作者不詳	一七一
增鏡	作者不詳	一八一

——終——

樂訓・文訓

樂訓・文訓　は共に貝原益軒の著せる教訓書にして、いはゆる益軒十訓の一。文道並に自然人生の樂を平易に懇切に說き、文章亦流暢なり。寛永七年八十一歲の時の作。

作者　名は篤信、益軒と號す。福岡藩の人、寛永七年(一六三〇)に生まれ、正德四年(一七一四)歿す。年八十五。

一　第一の見もの

櫻のほころび出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心をうごかして、えならぬながめなれ。これ我が日の本にて四時の花の多き中にも第一の見ものなれば、梅ちりて後、この頃のことばなは皆けおされぬ。この折から、春雨のしき〳〵降れば、わが宿の園の櫻はいかにあらんとうしろめたし。

けおさる　壓倒さる。
うしろめたし　氣にかゝる。

二　時節流るゝ如し

光陰箭の如く時節流るゝが如しといへるも、うけることにあらず。老に向へば、猶更に年月のはやく過ぐること恰も飛ぶが如し。あとをかへりみれば、五十のよはひを過ぎこしもさのみ久しからず。たとひ五十の後、又五十のよはひを經て百年にいたるとも、猶ゆくさきの月日いよ〳〵はやくして、程なく盡きなんこと思ひやられ侍り。いくほどなき殘れる齡をたのしみてこそ過ぐさまほしけれ。憂ひ苦しみて空しく過ぎなんはいとおろかなりや。

うけること　浮説。

廣島大學圖書之印

三　今日の日のうち

としゞに花は相似たれど、としゞに人は同じからず。老かさなれば、一とせのうちにもやうやく衰へ行きて、今の昔に如かず、後の今に如かざる事を知りて、かねてより悔なからんことを思ひ、時日を惜しみ、一日もいたづらに過すべからず。今日くれて明日もありとて恃むべからず、今日の日のうちを日々にをしむべし。

としゞに　年々歳々花相似タリ歳々年々人同ジカラズ。（劉廷之）

四　人の身

つくづくと思へば、樂多きこの世なるを、道を知らざればわれと心を苦しめ、天を怨み人を尤む。かく道を知らで憂おほき人は、くれまどふ心の闇こそむげにおろかなりといふべけれ。人の身金石にあらず、生けるものつひに死なざるはなし。又二たび生れくる身にしあらざれば、この世なる間は樂しみてこそありぬべけれ。

天を怨み人を尤む「子曰ク、天ヲ怨ミズ人ヲ尤メズ下學シテ上達ス我ヲ知ル者ハ其レ天カ」（論語）

五　眞の寶

心風雅にして、古書を讀み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を好み、四時のおしうつる折々の美景と、草木のかはるがはるさかえうるはしきとを見て樂しみ、貧しけれど飢寒のうれひなく、蔬食口になれぬれば、味ありて、肥濃なる美味をうらやまず、淡薄なるはかへつて身をやしなふに宜し。布の衣、紙のふすまいさゝか寒を防ぐに足れり。萑生ひて荒れたる宿に起臥しても、風寒のうれひなかるべし。もし幸に書をおほく貯へて架にさしはさまば、貧とすべからず。是れ眞の寶なれば、滿籯の金にまされり。

籯　三四斗を容れるカゴ。

六　貧居の樂

心安く身閑にして獨坐するも亦貧居の樂なり。世俗の宴遊をこのみ、さわがしき友多きにまされり。學このまざる人のとひこぬはかへつて情あり。心なき人のおのがつれづれといとまあるまゝに訪ひ來りて長居するはわびし。されどかゝる人を白眼にして見るはなさけなし。禮をうしなふべからず。

白眼　晉書阮籍傳に「籍禮教ニ拘ハラズ能ク青白眼ヲ爲ス禮俗ノ士ヲ見レバ白眼ヲ以テ之ニ對ス云云」とある。快く交るには青眼を以てし、然らざるには白眼を以てすること。

七　旅　行

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすゝぐ助となれり。これも亦わが徳をすゝめ、知を廣むるよすがなるべし。又奥まりたる山ふところに、岩根ふみて尋ね入り、もとより山水癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて歸ることを忘れぬ。あるは海べた、山遠き、眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にもまされり。

よすがたより。

八　秋　の　花

花は春とこそいへれど、秋もまた花おほかめり。秋の花の久しきに堪へて散りがてなるは、春の花の見る程もなくて、早く散りぬるにまされり。

散りがて散りがたいこと。

長月の比は秋の花も過ぎ、紅葉もまだしき折なるに、菊は百花におくれて、ひとり晩節をたもち、霜にほこりて操の色をあらはし、なべての花に、時を異にするのみならず、色・形・香ともにすぐれてあてやかなれば、此の時もし花多くとも、わきてあはれむべきに、秋の末にひとり盛なれば折にあひて、いとめでたし。元稹が菊を詠じて、不是花中偏愛菊、此花開盡更無花といへりしは、菊をめでし心猶うすし。

あてやか　高雅。

元稹　唐の詩人。

九　月

あたら夜の月なれば、同じくは心知れらん人と共に見んこそ本意なれど、同じ心に見ゆる人稀なれば、西行がひとりぞ月は見るべかりけるとよめるも宜なり。もろこしの人も、秋月は俗士

ひとりぞ云々　さびしさにあはれもいとゞまさりけりひとりぞ月は見るべかりける。この歌は千載集雑上、顯昭法師の作。

と見るべからずといへり。李白は、今人は古事の月を見ずといへれど、昔の世々の人の眺め來しも此の月なれば、古人のかたみとなれるも、昔おぼえて忍ばし。古今の人の世を去り行くは、流水のゆきてかへらざるが如し。唯月の光のみ古今かはる事なきこそ、こよなうめでたくたふとぶべけれ。

今人は云々　李白「把酒問月」の詩の中の「今人ハ見ズ古時ノ月」をさす。

一〇　六つのたすけ

書を讀み字をうつすに、あきらけき窓、いさぎよき机、筆硯紙墨の精良なるを得て用ふるも、亦人生の一の幸なり。この樂を得るもの少しと蘇子美がいへり。古には壁をうがちて書を讀みし人だにあれば、今この六つの助を得て、又燈火をやゝ親しむ人は、幸ありと思ひつとめて書を讀むべし。

この樂を云々　蘇子美（宋の人）曰はく「明窗淨几筆硯紙墨皆精良ヲ得、此亦人生ノ一幸事、而シテ此樂ヲ得ルモ亦少シ。」と。

壁をうがちて云云　西漢の匡衡をさす。

一一　ふみ見ること

四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見ることを樂しみ、つねにして止むべからず、なんぞ只三餘の時にかぎるべきや。春夏は日の長きを愛し、秋冬は夜の長きをよろこぶ。折を得てたのしむべし。日ながけれど事しげく、客多ければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ、日ひと日、夜ひと夜、ふみ見る益はいかなる樂にもかへがたし。經傳をよめば、見るたびに聖賢のをしへをまのあたり聞くが如し。たふとぶべきことかぎりなく、むなしく過ぎぬる隙をしむべし。狄仁傑の名教の内至れる樂あり、なんぞ俗人とかたることをこのまんやといへるもむべなり。

三餘　魏略に曰く「學ハ當ニ三餘ヲ以テスベシ冬ハ歲ノ餘リ夜ハ日ノ餘リ陰雨ハ時ノ餘リ。」と。

經傳　經は聖人の作。傳は賢人の作。

狄仁傑　字は懷英、唐の名臣、則天武后に仕ふ。

名教　儒教。

三　かたちうるはしく

かたちうるはしく、物よく言ひ、よききぬ著てまれびとに對し、すがた言葉はすぐれて、人のもてなしよく、そのふるまひうるはしく、目たつべきほどなれど、文字を知らず、古今の事にうとく、かたこと言ひて、人の耳にたてば、すがた言葉のうるはしきも空しくなり、人に見おとされ、あさましく下ざまに見ゆるは口惜し。

まれびと　客人。

駿臺雜話　室鳩巣の隨筆にして、彼が門弟子に語りし道德學術等に關する事を錄し、仁義禮智信の五卷に分る。文穩健典雅情味深長、蓋し和漢調和文の範とするに足る。

駿臺雜話

作者　名は直清、鳩巣と號す、江戸の人德川吉宗の侍講たり。邸を駿河臺に賜はる、世稱して駿臺先生といふ。萬治元年(一六五八)に生まれ、享保十九年(一七三四)歿。年七十七。

一朝がほの花

あさがほの花の一とき千とせ經る
松にかはらぬこゝろともがな

朝顔をよめる歌多けれども、大かた朝顔のあだなることをいひて、世のはかなきを知らするを趣向とする外は見えず。白居易が「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」といふ詩も、しひて榮枯をひとつにし、彭殤を齊しうする意にて、俗耳には高きやうにきこゆれども、いと淺き事になんありける。是等は瞿曇が涎を引き、莊周が唾をなむるに過ぐべからず。今松にかはらぬ心といへるは、それにてはなかるべし。朝に道をきいて夕に死するも可なりといへる意とこそ思ひ侍れ。朝に咲いて日影を待ちてきゆるは、朝がほの天より受けたる性なり。世には千とせを經る

白居易　晩唐の詩人、字は樂天、太原の人。
彭殤　長命と短命。
瞿曇　佛。
莊周　莊子。
涎を引き、唾をなむ　糟粕をなめることと。
朝に云々　論語、里仁篇「子曰ク、朝ニ道ヲ聞カバ、夕ニ死ストモ可ナリ。」

松さへあるに、是程はかなき生を得て、いさゝか己を忘れ外を羨むの心なく、朝なゝ〳〵いと快く見事に咲きて、受け得たる性分を盡して枯るゝこそ、花の見する誠なれ。いかであだには見るべき。それは松も同じ事なれど、朝顔のはかなきにて、一入そのことわりしるく見え侍り。されば、松の心に千とせなく、朝顔の心に一日なし。唯己が性分を盡すばかりなり。然るを、松の千とせを榮えと見るも、朝顔の一日をはかなしと見るも、唯見る人の欲目なり、松と朝顔の心に何かあらん。おもん見るに、朝顔も一日の壽といへど、己が受け得しまゝに殘りなく十分に咲きて、さて日かげを待ち得て消ゆれば、何の恨かあらん。松の千とせと脩短は大きにかはれども、何れも天命をつくして自らあきたる事は同じかるべし。これを松にかはらぬ心とはいふなり。翁もその歌にならひて、

脩短　長短。

天地にうけしまことをそのまゝに
　さきてはしぼむ朝がほの花

まことに世話にいふ兎唇の嘯きも心慰みにて侍り。各、さぞをかしくこそおぼすらめ。たゞ、詞をすてて意をとり給へかし。

兎唇　いぐち（鈌唇）

二　手折りし手を

盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは是れ亦士の常なり。もし時の模様につきて覺悟を變じ、世話にいふえりもとにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

えりもとにつく　權門に阿附す。

水邊楊柳綠煙絲　立馬煩君折一枝
唯有春風最相惜　慇懃更向手中吹

楊巨源　中唐の頃の詩人、字は景山。

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此の三四の句意婉にしておもしろくおぼえ侍り。よりて其の意を翁がよめる歌に、

なれてふく名殘やをしき青柳の
　手折りし枝をしたふ春風。

楊柳の人にをられて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほその手折りし手を去りやらで、をしみ顏に吹くこそ、いとやさしく覺え侍れ。古より忠臣義士の盛衰存亡をもて心をかへぬに喩へつべし。

三　いと口惜しきこと

儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく、利欲にさとくなる程に五常の道廢れて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとより賤しき身にて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力およぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼かし、精衞が海を塡めんに似たるべし。さはいへど、世を憂へ、民を新にするも吾

蚍蜉　蟻の一種。
精衞　小鳥。

が儒分内の事なれば、これを度外に置くべきにもあらず。いかなれば世に老師宿儒と稱する人の、好みて異說を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこそうけられね。たゞつとめて新奇を競つて俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる阿世曲學とはこれ等をいふなるべし。

四　藤房・正成・孔明

建武中興の人物にては縉紳家に藤原藤房、韜鈐家に楠正成、固より輿論の歸する所なり。もしその人品をいはゞ、藤房は公卿輔弼の臣たり、正成は將帥禦侮の臣たり。藤房龍馬の諫は直言極諫、朝廷を聳動す。まことに朝陽の鳳鳴といふべし。

孔明は臥龍なり。道德を懷抱し、功名を遺外し、草廬にて一生を終へんとせしに、はからざるに蜀の先主の三顧に遇ひて、已むことを得ずして出で仕へしが、一朝關趙が上に立ちて、君臣水魚のごとくなりし。

韜鈐家　兵家。

龍馬の諫　太平記に、藤房、龍馬に託して後醍醐帝を諫め奉りしこと出づ。

朝陽の鳳鳴　言行のすぐれて美なることをいふ。

蜀の先主　劉備。

五　花紅葉

一人のまらうど、春の花ばかりめでたきものはあらじ、花紅葉といへど、紅葉は花なきときに見ればこそあれ、花には及び難しといへば、又一人、紅葉もさのみいひくたすべからず、秋霧の晴間に、千林萬壑さながら錦をさらす如くなるは、春の山をも忘れつべし。今花にむかひて斯くいふは義山が殺風景の譏もあるべけれど、我は紅葉に心を寄すといふに、又一人、山に木有れば工則ち之を度る、賓に禮有れば主則ち之を擇ぶとあれば、所詮主の心にまかすべしといふ。

義山が云々　唐の李義山の雜纂に「殺風景」の目を擧ぐ。

山に木云々　「山ニ木有レバ工則チ之ヲ度リ、賓ニ禮有レバ主則チ之ヲ擇ブ。」（左傳）

白駒の隙すぎやすし　歳月の早くすぎるに喩へる。

黄金の術　不老不死の仙術。

董生　董仲舒、武帝に重用せらる。春秋を治め、毎に帷を下して講話す。

程朱　程顥・程頤・朱熹共に宋の道學者。

鄒魯　孔子と孟子。

韓歐　韓退之と歐陽修。

邯鄲の歩を學ぶ　邯鄲は趙の都、其俗能く歩行す。この意は、妄りに己の本分を捨てて他の行に倣ひ二つながら失ふに喩ふ。

六　慰みぬべき老の寝覺

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黄金の術成りがたし。されば、犬馬のよはひこれまであるべしとも思はれざりしが、いつしか老の波より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへ、近き頃より身に痿疾を得て手足もあがらず、たちゐも惱めるまゝ、昔の董生をまなぶとにはあらねども、此の三とせ、春の園を窺ふ事もかなはねば、閨の中ながら、梢につたふ鶯の音に殘りの夢をさまし、枕にかをる梅が香に、過ぎし昔を忍ぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學びの窗に年を經る甲斐ありて、程朱の道に從ひて、鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて、邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寝覺も慰みぬべき。

あるじまうけ　饗應の準備。

玉山倒る　人品よき人の酒に醉ひたるさまを形容したる語。

七　月に對して

いつしか秋のけしき立ちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。久しく翁のがり行かねば、此のほど老の寝ざめも覺束なし、いざたづね問はんとて、ある夕暮に、例の人々打ちつれて來しが、又もまゐらんとて歸らんとせしを、翁とゞめて今宵は月もよし、薄酒すすめ奉らん、しひてとまり給へといへば、翁の心をいかで背くべき。さあらばとて、各、座をしめて、清談の露やう〳〵繁き程に、家人やがて心得て、取りあへずあるじまうけし、肴取りそろへて、盃を出しけり。數獻に及びて玉山倒るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう、月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺ゆ。いづれの代にか又わが如く月に對して今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照すらめ、もしあ

つらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましと思ひ侍りといふ。

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時（古今集、僧正遍昭）

八　心短くして

翁が心は知己を一世にもとむるにも候はず、昔より邪僻妄誕にして根もなき事の盛んに世に行はれて、あなかしがましく聞ゆるは、女郎花の一時とや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を經て正道へかへらぬはなし。然るを心短くして、早く其の驗を見んと思ふは未練のことといふべし。

花月草紙　六卷・松平定信の隨筆にして、文學・教訓・感懷・觀賞等に亘つて、その高邁なる風度と、卓拔なる識見とを見る。文又簡淨典麗にして意味深遠なり。

花月草紙

著者　名は定信、樂翁と號す。磐城白河の城主なり。將軍德川家齊に仕へて老中となり經世家・文學者として盛名あり。寶曆八年（一七五八）に生まれ、文政十二年（一八二九）歿す。年七十二。

め　海草。
えせもの　馬鹿者。
こりずまに　懲りないで。
白浪　盗人をもいふ。
名たつ　命名する。

一　序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽燒く暇には、えうなき藻屑かい集めて、しほやの窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえせものの取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、こりずまにかいはさみ置きたり。かく白浪のよる〳〵ごとに數も積みしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。この藻屑の端つ方に、月と花との事なが〳〵しく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせもののせしことなりとぞ。「海人のさへづりとこそ言はまほしけれ。」と里の子は言ひき。

二　花

なしと聞けば、ありといはまほしく、惡しきと言ふをば善きと

引附く　こちつける。
ざえ負ふ　學才を自負する。
めかる　目離る。
ゆたけし　豊かなること。

ことかへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、唐國にもありとてさま〴〵例など引附くれど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、なしとこそいふべけれ。

いでや櫻といはでしも、花とだに言へば、こと木には紛れぬものを。ほの〴〵と明け行く山際、雲か雪かとばかり咲滿ちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、此處にのみ暮殘すけしきなどいふは淺かりけり。まいて、うてなののびやかなれば近劣りするなどいふは、かのことかへて、ざえ負ふ心に言ふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も、夕暮も、露のひるまも、めかるゝ時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに、花のかたちもゆたけく、匂さへもこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるもの

なれ。

さるを、何處にもありといふは更なり、曙、夕暮などと、面白からんやうにことば添ふるは、いまだ深く染めし心にはあらざりけり。すべて、ことばもて言ひ盡くさんと思ふは、いと淺き心かな。

曙の空おぼえて
曙のやうで。
いざよふ
ためらふ。

三　月

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるに、やや匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず。からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりとおもへば、いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月のかたより雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こは如何にせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらん隈はあらじと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれてうち見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ちゐたる雲にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見居たるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひ居たれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。

四　天に任すること

「久方の空に任せて、わがさゝやかなるざえを用ひざれ。」とはいへど、空に任するに深き心あるべし。星の光見ても、「はや沖はあらき風吹出でつ。このあたりへは明日のひるつかた吹來べし。」といふことも知れれば、心して乘るを空に任すとこそは言はめ。

久方
天空光の
空に任せて
天に任せて。

知れれ
れは現在完了り
の已然形。

沖の風吹くも吹かぬも問はずして、今此處の波平らかなればはや漕出でて行くを、空に任すとは言はじ。物食ふものにてもあれ、すべて身を養ふ道を盡くし、その程を慎みて後、いきしにを空に任すべきを、養のことは心とせず、たゞおのがほりする事にのみ隨ひて、いきしにを空に任すといふ事もありぬべし。

雪螢集めし窓　晋の孫康が雪のあかりにて書を讀み、晋の車胤が螢の光にて書を讀みしといふ故事。

五つの常　仁、義、禮、智、信。

五つの道　君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の道。

五　道まねぶ人

「かの人は雪、螢集めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心を盡くし侍るなり。されば、世の中の事にはいとうとく侍り。」といへば、「さるこそ誠の道まねぶ人なりけれ。」と譽めものする者ありとや。

もとより道まねぶ者は、五つの常、五つの道よりして、人ををさめ、己ををさむる道まねぶより外のことはなし。されば、世の事にさとく、今のあたりのみかは、千年の先つ世の事、見ぬもろこしの昔今のさまより、さかり衰ふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさ〳〵に至るまでも明らかなるこそ、道まねぶ人とは謂ふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とは謂ふべからん。

おろそか　物事にうといこと。

六　筆

「この筆はいとわろし。三度四度ものすれば、皆かぶろのやうになりぬ。」とて、とみに物書くをりは、墨もすらで硯の水をかいまはし、書きはつれば投置くにぞ、硯や祕閣のはざまなどに横たはりて、いつかさきもつりばりのやうになりて、かわきにかわきたるを、また惜しげなくたてざまに、干潟のあたりにて音出づるばかりにかいまはし、あるは齒もて嚙碎き、又は墨もて筆のさきをおしひしぎて書きつ。かくてはいかで命の長かるべき。よき

かぶろ　禿。

そじ　損じ。

筆をばまづかさとるもしづめてし、物書いたるあとにても洗ひものし、紙におしあて、又はすかし見て、一筋も亂さじとして置くめり。いとゞ命の長かるべきことわりなり。早くそじなんと思ふをば、いとあら〳〵しくなして、「これ見給へ。三度四度にはやかくなりし。」といふもをかし。

七　四つの時のうつりゆく景色

四つの時のうつりゆく景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふはいとくるし。散れば又こん年は咲きぬべし。いかに心を苦しむとも、霜白く氷堅きをりに蓮の咲くべきことわりなし。されど咲くを待ち、散るを惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

難かんめれ　かるめれ。かめれ。かんめれ。

那須與市　宗高。

八　文

「學問は人の道まねぶことなり。からうた作り、文つくるはせんなし。」とよく人の言ふことなれど、みやびは花の薫の如く、物の潤の如し。まいて、かの國の文字をおぼえて、ふみ讀むとも、文字のつかひざまにて深さ淺さのたがひめあるものにて、かの國の人のことは知り得難かんめれど、さすがにからうた作り、文作れば、おのづから詞の外なる心をも得るものとかや聞きぬ。さればなすには如かじかし。などてこれを禁ずべき。

九　那須與市

「那須與市は弓の上手にてもあるべけれど、馬を海に乘入れて、風にうごきて定まらぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。

射損じなば死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。「たゞ扇にのみ心ありて放ちたりとて、必ず中るべしとも言ひ難かるべし。」「さるに、心にたちかへりて神に祈念したるにて、心は内にとゞまりて外へ馳せず、遂に思ふ矢つぼたがはざりしは、わが心の誠にかへりて神明、良能の妙の出でしなり。」と言ひしが、さあらん事もありぬべし。

一〇 理窟

ことわりなきが、ことわりのまことなり。ことわりのごと行はるゝものならば、何の難き事もあらじを、さも知らで人と爭ひ、政を誹りなどしてたかぶる者は、ことわりのまことを知らぬとやいふらん。

至りしこと
極地に達したること。

六十にして耳順ふ
「吾十有五ニシテ學ニ志シ、三十ニシテ立チ四十ニシテ惑ハズ五十ニシテ天命ヲ知リ六十ニシテ耳順フ云々」（論語）

陳氏の云々
「人ノ足履ム所、數寸ニ過ギズ。然リ而シテ咫尺ノ途必ズ崖岸ニ顛蹶シ、拱抱ノ梁、毎ニ川

二 誠

「わが誠より貫ぬき出づれば、見ざる事も見え、聞かざる事も聞ゆめり。」といふは、いと至りしことにて、それをばかの孔子の君も「六十にして耳順ふ。」とも宣へりしぞかし。さるに、いさゝかもほりする心あれば、誠を蔽ふにぞその境に到ることなき。弓射る道を得て、かの妙なる奥意得し者は、弓には誠のはしをも得べし。弓に得しとて、それをもて馬に乗るべしと思ふべけんや。皆道知らぬより、たやすからぬ事をたやすきやうに言ふか。

三 餘地

「道路は足底の廣さだにあらば、あゆむべし。」といふは、例のことわりのみなり。いかであゆむべからん。「梁の上をあゆまば落

谷ニ沈溺スルハ何ゾヤ。其ノ傍ニ餘地ナキガ爲ノ故ナリ」（顏氏家訓）

物にせちなり　ある一事にのみ心をすゝめること。

うとまる　疎んぜられる。

ちぬべし。こは、かの陳氏の言ひたる餘地なきなり。あまりに事に甚だしく物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

一三　日新の教

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れると思ひて敗とるも多し。かの賢き人の愚なる人に欺かるゝも、一つ一つに新ならねばこそあり」けれ。昨日にくしと思ひし事心にそみ、去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして、身を終ふるまでも忘るなと語りし老人もありけり。

沈みはつ　活氣のなくなること。

一四　辟すれば正しきを失ふ

人を知るは、かたよりなき處より明かなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかで、わが心くもりて人の心を照さん。わが才智機轉にて照さんとすれど、時にとり暗き時あり、いかで照さん。

一五　家國の姿

家・國の姿は、若々とあらまほし。もし年老いたる姿になりもて行かば、物事沈みはてて人に見知られじと、物の色目も花やかならざれと、思ふまでになり行くぞかし。その心よりして、人に秀でんの心もとよりなければ、物の堪能・上手もたえはてぬるものとなん。

一六　桀紂を引きてなだむ

わが悪しきをば桀・紂を引きてなだめ、人の善きをば堯・舜を引きいでてとがむ。「かれはかゝる悪しき事なしぬ。」といへば、「げにさあらん。」といふ。「このものかく善きことし侍りぬ。」といへば、「いかゞあらん、いぶかし。」といふ。「げにも人は悪しき心あるものかな。」といへば、「善き名得まほしと思ふが故に、人の悪しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。」と言ひき。

桀・紂　夏ノ桀王と殷ノ紂王、共に暴君。

一七　花月の遊

今日はいと長閑なり、いでや隅田川原の花見んと、小舟に乗りて行きたるが、花見んと立出づるもろ人のさま、げにや都のみやびを盡くせり。様々の心々に打ちむれて行くに、女房なども何

心空にありく　有頂天になって歩く。

ばうぞく　不作法。

筑波　常陸國筑波郡。

王世の民の心　太平になれた民の心。

か口たゝきつゝ、心空にありくもあり。馬馳せて花をも眼にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々うちかこみて、つゝましげに行く女もあり。あるは木かげにてはやゝ傾け、何やらん、やたて出だし書いつけ、かうよりして花の枝につけて、われはがほなる風情なるもあり。今日はげに晴れに晴れて、一天に雲なく、富士も筑波も手にとるばかりに見えたれど、またそれを打ちながむる人もなし。ましてかく晴れたる日は、とみに風雨のありなどいふことは、つゆおもふ者もあらじかし。この長閑なる御代の春の御惠にぞ、かく心ゆたかにたのしび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづらひうれひもなきに、この花も昔よりつきぬ御惠深き露に生ひそひきとやらん聞けば、さ思ふ人もありやなしやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の惠をば思ひも寄らず、いつもかく空晴るゝものとばか

花を見すてて云云
「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる。」（古今集、伊勢）

ろの音ばかり云云
「秋雁鱠聲來。」（白樂天）

りも思はぬ輩多からんなど思ひかへして、四方をふと打ち見れば、筑波嶺のあたりいとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて蓑も笠もはなたで居たるが、はや艪おしたて漕ぎかへるを、「いかにこの花を見棄ててかへるは、かりがねにつらさやならへる。ろの音ばかりまなべよかし。」など口々にわらふを耳にも入れで漕ぎ去りぬ。

いつかその雲のいとひろごりてけるが、かの輩は露も知らず、日のかげろふも知らず。今日はあつきばかりなりとて、肌ぬぐもあり、または衣などぬぎて馳せありくもありぬべし。雨にさきだつ風のひと通り吹き落ちたれば、こは花よと思ふまもなく、いさご吹き立てたれば、たゞ驚きて居るがうち雨の降り出でたり。初は心地よき雨などともいひたらんが、後には人の聲に雨の音もせず。馬を馳せてかへるもあれば、おどろきあわてて堤よりまろびて落つるもあり。女などはいといたう見苦しきまであわてふためきて、はじめ裝ひしをも、自ら夢とや思ふらんさまなり。まして酒に醉ひて濡るゝも知らず顔に笑ひなどするもあれば、「思ひ寄らぬおろかなる雨かな。」と怒り罵るもありぬべし。

かの舟は早く漕ぎ行きぬれど、わが住む浦は遠ければ、とある橋の下に舟とめて居たるが、橋の上など人の走りさわぐは、なるかみのやうに聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川のおもに見ゆる頃、夕月のことさらに新しくみがき出でたれば、はや雨の名殘もなし。堤の花いかゞあらんと漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間にほの〴〵と月の見えたるは、わがためにつくりなしけんと思ふばかりなり。濡れにし人は

かぞいろ　父母。

いかゞしたりけん、この月などは思ひも寄らでであらんなど、思ふも何となく心おごり行きぬ。かぞいろも「われひとり人にこえて心地よしと思ふときは。」といましめ給ひたれば、またあやまちやしぬべくとおそろしく覺えければ、飲み殘したる酒携へてつひに漕ぎかへりぬとか。

玉勝間

玉勝間　十五卷。本居宣長の隨筆にして全編一千箇條、大和言葉・大和心・物學び等に關して說く所極めて懇切にして、理路整然精妙を極めたるものなり。寛政六年より文化八年に亘りて刊行せらる。玉勝間の名は自ら卷頭に題したる「ことぐさのすゞろにたまるたまかつまつみて心をのべのすさびに」と言ふ歌による。

作者　名は宣長、鈴の屋と號す。伊勢松阪の人享保十五年(三三九〇)に生まれ、享和元年(三四六一)歿す。年七十二。

とりまかなひ
取扱ひ方。

ずゐぶん
それ相應に。

かへさひ
繰返し。

一　あらたなる說を出す事

ちかき世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひさとくかしこくなりぬるから、とり〴〵にあらたなる說を出す人おほく、其の說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと、よにことなるめづらしき說を出して、人の耳をおどろかすこと今のよのならひなり。其の中には、ずゐぶんによろしきこともまれにはいでくめれど、大かたいまだしき學者の心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらん勝たんの心にて、かろ〴〵しくまへしりへをも考へ合せず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじきひがごとのみなり。すべて新なる說を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひおもひて、よく

うけばる
引きうける。

須賀直見
宣長の高弟、宣長と同郷にて松坂の人、安永五年歿。

廣く大きなる書
浩瀚な書籍。

たしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりてたがふ所なくうごくまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後にいま一たびよく思へば、なほわろかりけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

二　ふみよむことのたとへ

須賀直見がいひしは、廣く大きなる書をよむは、長き旅路をゆくが如し。おもしろからぬ所もおほかるを、經行きては又おもしろくめさむるこゝちする浦山にもいたるなり、又あしつよき人ははやく、よわきはゆくことおそきも、よく似たりとぞいひける。をかしきたとへなりかし。

ひたぶるに
一途に。

うけぬ顔
不承知な顔。

いひけつ
否定する。

三　あらたにいひ出でたる說

大かたよのつねにことなる新しき說をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたりは世のなかの學者ににくまれそしらるゝものなり。あるは己がもとより來つる說といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるにすててとりあげざる者もあり。あるは心のうちには、げにと思ふふしもおほくあるものから、さすがに近き人のことにしたがはんことのねたくて、よしともあしともいはで、ただうけぬかほして過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、其の中の疵をあながちにもとめ出でて、すべてをいひけたんとかまふる者も有り。大かたふるき說をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほ

さてある
そのまゝにして
なる。

ひかくして、わづかに、二つ三つのとるべき所のあるをとりたてて、力のかぎりたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわろきことをいひたてて、八つ九つのよきことをもおしけちて、ちからのかぎりは我も用ひず、人にももちひさせじとする、こは大かたの學者の習ひなり。然れども又まれには、新なる說のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改めしたがふたぐひもなきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、あらたなるよき說をきゝては、かくてこそはといみじくよろこびつゝ、たちまちにしたがふたぐひも有りかし。大かた新なる說は、いかによくてもすみやかには用ふる人まれなるものなれど、よきは、年をへても、おのづからつひには、世の人のしたがふものにて、あま

心おそく　心のにぶいこと。

ねく用ひらるれば、其の時にいたりては、はじめにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせにしたがはんも、猶ねたく人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、ふるきをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論さだまりて、皆人のしたがふよになりては、始よりすみやかに改めしたがひつる人は、かしこく心さとくおもはれ、ふるきにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざぞかし。

四　おのが物學びのありしやう

おのれいときなかりし程より、書をよむことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひてよみける。さるははかゞしく師につきて、わざと學問すとにもあらず。何と心ざすこともなく、その

二十あまり云々　寶暦二年翁二十三歳の時、京に上りて儒學を堀景山に學べることをさす。

おもむけ　指圖。

改觀抄　僧契沖の著、百人一首を解釋したるもの。

すぢと定めたるかたもなくて、たゞ唐の大和のくさ〳〵の書を、あるにまかせ、うるにまかせて、古き近きをいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき。

かくて二十あまりなりしほど、學問しにとて京になむ上りける。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせむとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説を知り、そ

餘材抄　古今和歌集を註釋したるもの。二十卷。
勢語臆斷　伊勢物語を註釋したるもの。四卷。

のよに勝れたるほどをも知りて、この人のあらはしたるもの、餘材抄・勢語臆斷などをはじめ、その外もつぎ〳〵にもとめ出でて見けるほどに、すべて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やう〳〵にわきまへさとりつ。

さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは大かた心にかなはず、その歌のさまもをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝよみありきけり。さて人のよむふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのが立ててよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞありける。そはさるべきことわりあり、別にいひてむ。

さて後、國に歸りたりしころ、江戸より上れりし人の近きころ出でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居の大人の

冠辭考　賀茂眞淵の著、枕詞を解釋したるもの。十卷。
縣居の大人　賀茂眞淵。

御名をも始めて知りける。かくて其の書、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠くあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへりいま一たび見ればまれ〳〵にはげにさもやとおぼゆるふし〳〵も出でければ、又立ちかへり見るに、いよ〳〵げにとおぼゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の說は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたかくのごとくなりき。

さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢのもの、古き近きこれやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざしありしかど、とり立ててわざと學ぶ事はなかりし

こと遠し　絲遠い。
あるやうあるべし　相當の理由があるだらう。

に、京にのぼりては、わざとも學ばむとこゝろざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの說になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの說くおもむきは、みないたくたがへりと、はやく悟りぬれば、師と賴むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でむと思ふこゝろざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへす讀みあぢはふほどに、いよ〳〵心ざし深くなりつゝ、この大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安の殿の仰せごとをうけたまはり給ひて、この伊勢の國より、大和・山城など、こゝかしこと尋ね巡られし事のありしをり、この松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで後に聞きていみじく口惜しかりしを、かへるさまにも又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いと〳〵うれしく、急ぎ宿りにまうでて、はじめて見え

古のまことのむね　眞の古代精神。

田安の殿　德川宗武。

奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教を承ることにはなりたりきかし。

名簿　師の門に入る時などに、證として送るもの。

五　縣居の大人の御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人の教をうけたまはりそめしころより、古事記の註釋を物せむのこゝろざしありて、そのこと大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、「われもものとより神の御ふみを解かむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごゝろを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずはあるべからず。然るにそのいにしへのこゝろをえむことは、古言をえたるうへならではあたはず。古言をえむことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉を明らめむとするほどに、すでに年老いて殘のよはひ今いくばくもあらざ

から心をきよくはなる　支那思想をすつかりすてる。

れば、神の御ふみをとくまでにいたること得ざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學びなば、その心ざしとぐることあるべし。たゞし世の中のもの學ぶともがらを見るに、皆ひきゝ所を經ずて、まだきに高きところにのぼらむとする程に、ひきゝところをだにうることあたはず、まして高き所はうべきやうなければ、みなひがごとのみすめり。このむねを忘れず、心にしめて、まづひきゝ所よりよくかためおきてこそ、高き所にはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはらこのゆゑぞ。ゆめしなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそ。」と、いとねもごろになむ誡めさとし給ひたりし。この御さとし言のいとたふとくおぼえけるまゝに、いよ〳〵萬葉集に心をそめて、深く考へくりかへし問ひたゞして、いにしへのこゝろ詞をさとりえて見れば、まことに世の物識り人といふものの神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになむ有りける。

六　師の説になづまざること

おのれ古典を解くに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき事あるをばわきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、「後によき考の出で來らむには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそ。」となむ教へられし。こはいと尊き教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた古を考ふる事さらに一人二人の力もて、ことゞ〳〵くあきらめ盡すべくもあらず、又よき人の説ならむからに、多くの中には誤もなどかなか

らむ。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへのこゝろことゞく明かなり、これをおきてはあるべくもあらずとおもひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよき考もいでくるわざなり。あまたの手を經るまに〳〵、さきゞのうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎつぎにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の說なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるに古きをまもるは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

かしこし　畏れ多し。

又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その說にまどひて、長くよきを知ることなし。師の說なりとして、わろきを知りながらいはず、つゝみかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみたふとみて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古をおもひて、ひたぶるに道の明かならむ事を思ひ、古のことの明かならむことをむねとおもふが故に、わたくしに師をたふとむことわりの缺けむことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと譏らむ人は譏りてよ。そはせむかたなし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

我を用ふ　我が教を奉ずる。

七　わがをしへ子にいましめおくやう

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よき考のいできたらむには、必ずわが說にな泥みそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせむぞ、吾を

用ふるにはありける。道を思はで、いたづらにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

八　富貴を願はざるをよきことにする論ひ

世々の儒者、身の貧しく賤しきをうれへず、富み榮えを願はず喜ばざるをよき事にすれども、そは人のまことのこゝろにあらず。おほくは名をむさぼる例のいつはりなり。まれ〳〵にさる心ならむ者ありとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよき事ならむ。ことわりならぬふるまひをして、あながちに願はむこそ、あしからめ、ほど〳〵に務むべきわざをいそしく務めて、なりのぼり富み榮えむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身おとろへ家貧しからむは、うへなき不孝にこそありけれ。たゞおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝を忘るゝ

いさぎよき名潔白といふ評判。

は、もろこし人のつねなりかし。

九　一むきにかたよることの論ひ

世の物識り人の、他の説のあしきをとがめず、一むきに片寄らず、これをもかれをも捨てぬさまに論をなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかに譏るとも、わが思ふすぢをまげて從ふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大かた一むきに片寄りて、他説をばわろしととがむるをば、心せばくよからぬ事とし、一むきには片寄らず、他説をもわろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、必ずそれさしもよき事にもあらず。據るところ定まりて、そを深く信ず

おいらか鷹揚。

る心ならば、必ず一むきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをば取るべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは、皆あしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわりぞかし。然るを、これもよし又かれもあしからずといふは、よる所さだまらず、信ずべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さだまりて、そを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかにもおもふらむ。われは一むきにかたよりて、他説をばわろしととがむるも、必ずわろしとは思はずなむ。

一〇　前後と説のかはること

同じ人の説の、こゝとかしことゆきちがひて、ひとしからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の説すべて浮きたるこゝちのせらるゝ、そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。始より終まで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事の、ほどへて後に又異なるよき考の出でくるは、常にある事なれば、始とかはれることあるこそよけれ。年をへて學問すゝみ行けば、説は必ずかはらでかなはず、またおのが始の誤を後に知りながらは、つゝみかくさで清く改めたるもいとよきことなり。

殊にわが古學（いにしへまなび）の道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにこと〴〵くは考へつくすべきにあらず、人をへ、年をへてこそ、つぎ〳〵に明かには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、前なると後なると異なることは、もとより

あらではえあらぬわざなり。そは一人の生のかぎりのほどにも、つぎ〳〵明かになりゆくなり。されば、その前のと後のとの中には、後の方をぞ其の人の定まれる說とはすべかりける。但し又みづからこそ始のをばわろしと思ひて改めつれ、又後に人の見るには、なほ始のかたよろしくて、後のは中々にわるきもなきにあらざれば、とにかくにえらびは見む人の心になむ。

二　ふみ寫し物書くこと

ふみを寫すに、同じくだりのうち、あるは竝べる行などに同じ詞のあるときは、見まがへてその間なる詞どもを寫しもらすこと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、その間一ひらを皆がらおとすことあり。これら常に心すべきわざなり。又よく似て見まがへ易き文字などは、殊に

皆がら　皆ながら。

おふな〳〵　身分相應に。

なめし　無禮。

まがふまじくたしかに書くべきなり。これは寫し書きのみにあらず、大かた物書くに心得べきことぞ。すべて物を書くは、事の意を示さむとてなれば、おふな〳〵文字さだかにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、いかなることとも讀み解きがたきが世に多かる、あぢきなきわざなり。常に書きかはす消息文などは、文字讀みがたくては言ひやるすぢゆき通らず、讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつゝかへさひ讀めども、つひに讀み得ずなどしては、こゝ讀み難しと返し問はむも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

三　手書くこと

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問

あかずうちあはね心地　物足らずその人に相應しくないやうな心地。

おもなくあつかましく。

などする人は、殊に手あしくては心おとりのせらるゝを、それ何かは苦しからむといふも、一わたり理はさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。宣長いと拙くて、常に筆取るたびに、いと口惜しういふかひなく覺ゆるを、人の請ふまゝに、おもなく短冊一ひらなど書きいでて見るに、我ながらだにいとかたはに見苦しうかたくななるを、人いかに見るらむと恥づかしく胸痛くて、若かりし程になどて手習ひはせざりけむといみじうくやしくなむ。

一三　おのれとり分きて人に傳ふべきふしなきこと

ひめごと秘傳。

おのれは道のことも歌のことも、縣居の大人の教の趣によりて、たゞ古の書どもを考へ覺れるのみこそあれ。その家の傳へごととては、受傳へたること更になければ、家々のひめごとなどいふ限は、いかなる物にか一つだに知れることなし。されば又人にとりわきて、殊に傳ふべきふしもなし。すべてよきことは、いかにも〳〵、世にもひろくせまほしく思へば、古の書どもを考へて、覺り得たりと思ふ限は、皆書にかき表して、つゆも殘しこめたることはなきぞかし。おのづからもおのれに從ひて、物學ばむと思はむ人あらば、たゞ著せる書どもよく見てありぬべし。そを放ちて外には、更に教ふべきふしはなきぞとよ。

一四　歌も文もよく整ふは難きこと

をさ〳〵あんまり。

近き世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とまることは程々にあまたあんめれど、それはたいかにぞや覺ゆるところはまじりて、大方瑕なくとゝのひたるはをさ〳〵見えず。これを思へば、後の世にして古をまねぶことは、いとい

あながちなるにやあらん　無理なことであるかも知れぬ。
よきほどにて心をやる　よいかげんで滿足する。

と難きわざになむありける。古の賢き人々のだに、これはしも露の瑕なしと覺ゆるは、多かる中にも少くなむあれば、まして今の人のは、聊かなる瑕をさへに言ひたてむは、あながちなるにやあらむ。されど同じくは、人のいさゝかも難ずべきふしまぜぬさまにこそはあらまほしけれ。よきほどにて心をやるをば、唐土の古の人もよからぬことに言ひおきけるをや。

一五　師を擇べ

物學びに志したらむには、まづ師をよく擇びて、その教のさまをよく考へて、從ひそむべきわざなり。智にぶき人は更にもいはず、もとより智とき人といへども、大方初に從ひそめたるかたに、おのづから心は引かるゝわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことをえさとらず。又後にはさとりながらも、年頃のならひは、さすがに捨てがたきわざなるに、我とかいふ禍神さへ立ちそひて、とにかく强ひごとして、なほそのすぢを助けむとするほどに、終によき事はえものせで、ひがごとのみして、身を終ふるたぐひなど世に多し。かゝるたぐひの人は、勉めて深く學べば、學ぶまに〳〵、いよ〳〵わろきことのみさかりになりて、おのれ惑へるのみならず、世の人をさへに惑はすことぞかし。かへすがへすも初より師をよく擇ぶべきわざになむ。

我　我意。

一六　人のよしあし

人のたゞ一言たゞ一行によりて、その人のすべてのよきあしきを定めいふは、からぶみの常なれども、これいとあたらぬ事なり。すべて、よき人といへども、稀にはことわりにかなはぬしわざもまじらざるにあらず。あしき人といへども、よきしわざも

まじるものにて、生ける限りのしわざ、ことゞ〳〵によきあしき一かたに定まれる人は、をさ〳〵なきものなるを、いかでかはたゞ一言一行によりては定むべき。

一七　後の世の勝れること

古よりも後の世の勝れること萬の物にも多し。その一つをいはむに、古は橘をならびなきものにしてめでつるを、近き世は蜜柑といふ物ありて、この蜜柑に比ぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。これをもて思へば、今より後も亦いかにあらむ、今にまされる物多く出で來べし。今の心にて思へば、古は萬に事足らず、あかぬこと多かりけむ。されどその世には、さは覺えずやありけむ。今より後また、物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事足らずとは覺えぬが如し。

おされたり　壓倒されてゐる。

琴後集　十五卷。村田春海の歌文集なり。自序に文化七年、新造の庵の内に、父が遺愛の琴を据ゑ、琴がみに硯火とり、琴じりに厨子を置きて、年來の歌文を藏む。よりて集に名づくる由を述ぶ。

琴後集

作者　名は春海、江戸の和學者にして眞淵に學び、文章に長ず、延享三年(一七四六)に生まれ、文化八年(一八一一)歿す、年六十六。

つい建つ　築き建てる。
たゞに　すぐに。

一　清水濱臣の泊泊舍の記

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱が町とぞいひける。こゝに蘆原刈り開きて、つい建てたる伏屋あり。そはたゞにその池に臨みたれば、名を泊泊舍となむいふなる。

そも〳〵霞たなびく春のあしたは、をのへの木末をうつして、花の鏡にむかひ、雁鳴きわたる秋の夕べは、雲間の影をうかべて、月の御船をとゞめ、あるは蓮花咲く夏の日、あるはみ雪降る冬の夜、折につけ時に隨ひて見る目のあはれなむ盡きざりける。あるじは深くみやび好める人にて、四つの時のあはれをすぐさず、こを古ざまの言の葉にのべて思をやり、又唐土風のしらべに習ひて、心をしも慰めけり。されば魂あへる人々、花にあくがれ、月にたどるも、常にこの伏屋をなむ訪ひ來にける。

鳥の跡　文字文章。

林にやどる鶺鴒云々　鶺鴒ハ深林ニ巣ヘドモ一枝ニ過

一日あるじいひけるは、世を經て絶えざるものは鳥の跡なり。いでこの屋の樂をも、人々とあひ睦べる心をも、長くうみの子のつぎ〳〵に傳へて、わが形見とせむことのゆゑよし記してよとあれば、卽ち筆さしぬらして、聊か物のはしに書きつく。寛政といふ年の七とせかんな月。

二　知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなき物はあなれ。高き賤しき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、唯足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢の嵐をうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。「林にやどる鶺鴒は、僅かなる小枝の影をのみたのみ、流に水もとむる鼠は、たゞ腹にみたすに過ぎず。」とこそ古人もいひ

ギズ、偃鼠ハ河ニ飲メドモ滿腹ニ過ギズ。（莊子）

梅尾の昔を云々　建久二年（紀元一八五一年）、僧榮西が宋から歸朝する時茶の實を持ち來つてこれを山城國梅尾の明惠上人に贈つた。上人は喜んで、その種を深瀨の園に植ゑた事がある。これが我が國の茶のはじまりである。

古人云々　知足者富。（老子第三十三）同日を竝べて云々　同日の論ではない。

つれ。かゝることわりをだに分たば、限あるこの世に、限なきことを思ふべきかは。

茲に中村のぬしなむ、能く塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の樞に心の月をすましめ、花をつむ夕、閼伽をくむ曉、御佛につかふる暇ある時は、冰をくだき雪を煮て、梅尾の昔をしのぶめ。るわざにしも、心をなむ慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、又人を羨むべきふしをも思はで、己が心から事足るわざにしもあれば、彼の古人のいひけむことわりにこそかなはめ。いでや、うつせみの世の限なき求ある際とは、日を竝べてあげつらふべくもあらざりけり。うべなるかな、この住家をしも、足ることを知るとは名づけしこと。

三　隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、萬にさまざまなれど、時にそむき折にあはで、つきづきしからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は、埋火の暖かなるを思はず、冬の夜に冰水の涼しさをば忘れつべし。古の人も春の網代、八月の白重をこそ、すさまじきことのためしには、引き出でたりけれ。かゝればはかなきすさみも、折にあひたるはをかしく、見所なき木草も、時を得たるは、めづらかになむ覺ゆめる。

しかはあれど、人草しげき巷の、所せく門立ち竝べたらむあたりには、時をすぐし折を失ふたぐひ多くて、月に便りよきは花に疎く、水に由あるは山遙かにて、四つの時の行きめぐるに隨ひて、心をやるべき住ひは、いともいともかたしや。

茲に前田の主の高殿こそ、あやしく所得ては覺ゆれ。後は市路につゞくものから、前は世離れたる望あり。春はをのへの花

春の網代云々　すさまじきもの、春の網代、八月の白重云云。（枕草紙）

あやしく　不思議にも。

言の葉　詩歌文章。

芳宜園　橘千蔭の家號。

こてふにも似ぬ夜云々　月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず。（古今集）

のかをりを、居ながら袂にしめ、夏は水際清き池の蓮葉を、舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪に歌ふも、すべて山水のあはれをそへざる折なむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて、友に交らふこと廣ければ、時にふれ折をすぐさず訪ひ來る人々、皆みやび好まざはなし。かくとこしへに、飽く世も知らぬ高殿なればとて、聞中大徳の殊更に、時に隨ふてふことをもて名づけられたるは、深き心しらひにこそありけらし。

四　八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る記

芳宜園の月のまとゐは年ごとの契なれば、こてふにも似ぬ夜のさまなれど今宵も例の人々まうで來にけり。さるは降りくらしたる雨のなごり、晴れゆかむ空も覺えず。ましてさやけき光待出でむはいとゞ心もとなきを、「更け行かばかくのみにはあらじを、今宵は寢で明してまし。」など、いひつゝ伊豫簾むなしうかかげて、空のみうちまもらるゝも、いとわりなしや。今宵は名におふ園生の花も、徒に夜の錦にて淺茅がもとの松蟲のみ、やうやう聲そはりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれはそへつべし。

晴間なき月をいかにといひ〳〵て、
　空ながめにや今宵あかさむ。
かきくらす、雲間の影はうとくとも
　月まつ蟲よせめてかたらへ。

五　初雁を聞く記

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野づらの住ひぞいはむ方なくをかしき。そともの小田の穂波は、かつ〴〵色づきそめて、

かつ〴〵　僅かに。

山を望めば云々　山ヲ望メバ幽月猶影ヲ藏ス。砌ヲ听ケバ飛泉轉聲ヲ倍ス。（和漢朗詠集菅原文時）

萩の上露云々　鳴き渡る雁の涙やおちつらん物思ふやどの萩の上露。（古今集）

霞みていにし云云　春霞かすみていにし雁がねは今ぞなくなる秋霧の上に。（古今集）

世をうらみて云云　初雁の鳴きこそ渡れ世の中の人の心の秋しうければ。（古今集）

中空に物を思ひ云々　初雁のはつかに聲をきゝしより中空にのみ物を思ふかな。（古今集）

玉梓のたより云云　秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる誰が玉づさをかけてきつらむ。（古今集）

此の世をかりと云々　秋霧のはれぬ雲井にいとゞしく此の世をかりと云ひしらすかな。（源氏物語）

籬の本の小萩は、折得顔にほころび渡れる、露の匂、風の音なひ、いづれあはれをそへざるなむなかりける。さるは夕月の面白きを、たゞにやはすぐさむとて、蓬生の露うち拂ふなるは、我がたまあへる人々なりけり。

伊豫簾高うまけば、村雨のなごりの月は絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたゝずまひも、月影にもてはやされて、やうやうあらはれ行きぬ。「山を望めばかすかなる月」と、口ずさみ出づれば、折しも峯飛びこゆる一つらの聲さだかなるは、この麓田に落つるなるべし。げに「萩の上露もたゞならず。」など言ひあへるほどに、一人がいひけるは、「霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを、秋霧の上に聲聞き初むるが、世にめづらかなることは更にもいはじ。すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのべ、すゞろなる心をうごかしつべきもの、いと多かる中に、世をうらみては人の心の秋を悲しみ、うきを歎きては中空に物を思ひ、遠つ人をしたふとては玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへては、この世を假とたどるも、折にふれ事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。いでや今宵のなぐさめに、このくさ〴〵の心によそへて、おの〳〵事のべたまはむなり。」とあれば、澄み昇る月影に向ひて、うそぶきいでたるは、心々の引く方なるべし。

世をあきと、鳴きてすぐなる初雁を、
　わが身のよそに聞きやはつべき。

となむあるは、世をあぢきなく思ふ方あるにや。

むねの雲、いつかは晴れむ初かりの、
　聲もらすべきおもひならねば。

いかなる人の上ならむ。

旅衣、いくたび秋をかさねまし、
また初雁の聲をきゝつゝ。
こは故郷をわすれぬ人なれば、
雁が音の、おくれさきだつ一つらを、
さだめなき世のたぐひとも見む。
法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。

六　上田秋成の許へ

春立ちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。
今は巖の中なる住ひをふり捨てたまひて、巷の花柳に立交らひ給ふらむは、いかに心ゆく御住家ならまし。
巣ごもれる、谷の鶯いかなれば、
都のはるにこゝろひかれし。

市の内に隠れ云云
少隠ハ陵藪ニ隠レ、大隠ハ朝市ニ隠ル。（文選、晋の王康琚の詩句）
みやび交す
風雅の交際をする。
遠くて近き云々
遠くて近きもの、極樂船の路云々。（枕草紙）
遠の御門
江戸。

となむ聞えまほしき。　されどうき世の塵ののがれがたかるも、猶市の内に隠れけむ古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみみやび交し給ふらむは、山住みのつれづれならむよりはと、おしはかりまゐらするものから、徒に千里のよそにありて、萬まのあたり聞え承らぬこそあかぬわざなれ。
さはいへ、雁の翅の行きかひだに絶えずば、なか〳〵に遠くて近きたぐひとや思ひ慰み侍らむ。　柳の糸のくりかへしつゝ、今年もとだえなく聞えまゐらせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音なをしみたまひそ。

七　伴蒿蹊におくる書

秋の日數も殘りすくなうなり侍りにたるを、都の御住ひよ、いかに明し暮し給ふぞ。　この遠の御門は、大方に山いと遙かにて、

立田姫　秋の神。

御手染　詠んだ歌。

あなかしこ　決して。

露霜の心おそきならひに侍れば、立田姫のすさみもはかゞしうも侍らずなむ。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、なにの山里、くれの古寺、御心ゆくかたぞ多かりなむ。

都人、いづれの山のにしきをか、

言葉の色にたぐへては見る。

この頃は御手染のめづらかならむこそ多からめ。風のたよりをわすれ給はで示したまはゞ、下照る影に伴はれ侍らむ心地せむは、嬉しきわざなるべし。あなかしこ、立つ霧にな隔てたまひそや。

八　對月言志といふことを題にてかけることば

伊豫簾高うかゝげて、ふけゆく影をひとりうちまもりて、つら

つら思ひみれば、自ら心の塵も名殘なくて、なべて萬のことぐさこそ隈なく思ひいでらるれ。さるは千種の花に露のにほひをそへ、絲竹の音の響をすますらんたぐひの、よのつねのをかしさをば、さらにも言はじ。いでや、すみのぼる光の高くあらはれて、人の目とゞめんに眩きばかりなるも、時の間にあやなき霧のまよひにかきけたれて、たゞ闇かとばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるもやがて西になることのとゞめがたきに、うき雲の定めなくて、昨日は榮え、今日は衰ふる世の有樣こそ、まづ覺ゆれ。又、淺茅が露に宿れども所せくもおぼえず、海原の波に浮びても廣きを知られざるは、高きみじかき、おのがじしのすみかのきはぎはにつけて、身のやすかる心しらひによそへつべきもあはれなり。また、落ちたぎつ瀨々の白波は、これがために清さをませど、野澤の水の濁りに宿りても更にみしぶの汚しさをきらはざ

みしぶ　水垢。

わが世の傾くを嘆き
秋のはじめになりぬれば、今年も半はすぎにけりわが夜ふけゆく月影の傾く見るこそあはれなれ。（慈鎮和尚）
老となるもの大方は月をもめでじ、これぞこのつもれば人のおいとなるもの。（古今集、在原業平）

るは、世に違ひ事忤ふことなくて、光を韜み跡を隠すとかいふらんさかし人の心の奥さへ汲み知られぬべし。また、有るを有りとも見ず、無きを無しともさだめあへぬひじり心のさとりも、ただこの光を磨きてこそ照すべけれ。かゝれば徒らにわが世の傾くを嘆き、老となるものとのみうちながめんは、いともいとも心あさしや。

大方に見てやはすぎん空の月
ちゞに心をおもひよせなば。

年々隨筆

年々隨筆　は石原正明の筆述に係る辛酉上・辛酉下・壬戌・癸亥・甲子上・甲子下の六卷に加へたる總稱なり。

作者　名は正明、遂堂と號し、喜左衛門と稱す。尾張の人、始め本居宣長の門に入り、後塙保己一に師事す。典故に通じ國學の造詣深く、自ら一家の見を立てて古學家流の固陋を難せしことこの隨筆に見ゆ。寶暦十年（一七六〇）に生まれ、文政四年（一八二一）沒す、年六十二。

唐人の　晉の庾亮が武昌揚子江のほとりの南樓にて、友と月を賞した故事。

南の樓云々　南樓の會のこと、秋夜月明の時に宴を開く。

一　月

月は水のほとりことによろし。いと大きなる川ののどやかに流るゝあなたの岸にまどゐしてうち笑ひなどしたる、唐人の登りけむ南の樓おもひ出でられて、誰ならむとゆかしきに、千里にあきらかなりと詠ずるにやあらむ、ほの〴〵聞ゆるいとをかし。

ゆふべや云々　倒置法。

にほひ　つやゝかな光。

二　ゆふべやまさりたらむ

ゆふべやまさりたらむ。村雨なごりなく晴れ、風いと涼しうて山の端の雲いと白うわざとならずところ〴〵に懸れるに、いざよふ月の今出づべきにやあらむ、にほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峰の松原濃きみどりなるに、茜の色燃ゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

散るぞめでたき　殘なく散るぞめでたき櫻花、あり て世の中はてのうければ。（讀人不知（古今集））

あへなき心地　はりあひのない心地。

三　櫻

散るぞめでたきと詠みしもことわりなり。櫻のさかりはただ二日三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、又來む春はと心いられして待たるゝも欠しからぬ故ぞかし。唐桐といふもの、葉のさま涼しげに、花の色いとめでたけれど、夏の半より秋過ぐるまで、たゞ同じさまに咲きたるに飽きはてて、とく枯れよかしとさへぞ思はるゝや。

おきまどはせる　心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花。（凡河内躬恒（古今集））

四　菊

唐國にては菊は黃なるを愛づめり。詩どもにも黃菊・黃花などぞ聞ゆる。皇國にはおきまどはせると霜によそへしより始

めて、白きをむねと言ひならはしたり。實に手を盡したる種々の色よりも、白菊・黃菊のいたく大きならず、小さくもあらぬを、わざとつくろひなどもせで咲かせたるこの園の中など、そこらの松蔭に匂ひみちたるこそをかしけれ。そが菊とは黃菊のことなりといふ、さる事にや何がしとかや聞えし連歌師の句に、

そが菊　黃菊の異名。

何がし　服部嵐雪。

黃菊白菊その外の名はなくもがなさる事なり。

五　古今のうつりかはり

學の道にこゝろざす人は、古より今に變り來し有樣をよく知りえむと心がくべきわざなり。古の事、今より見ては、いと思の外に異なるふしあるものにて、事によりてはその移り來しことわりわかぬもあり。さるをたゞひたぶるに文のうはべと今の世のさまとをおもひあはせて、大方にのみ心得ゐては、かすめる夜半の月見るやうにて、いとおぼ〳〵しきものなり。そをあきらめむには、廣く書を讀み、おのが考をもよく定めではなしえぬことにて、いとかたきわざにしあれど、もの學ばむとするものは、常にその變り來しさまをよくあきらめむと心がくべきものぞかし。

おぼ〳〵しはつきりせぬこと。

六　梅

梅の花いとめでたし。香はもとよりいはむ方なし。色も羅浮のをとめの月のもとに立てりけむ昔おぼえて艶にやさし。大方世の人は櫻をのみめでたきものにする、それまことにめでたけれど、桃・海棠など及ばずとも傍ある心地するに、これは異木の冬籠りたる中に匂いとこよなくて、氷のひまより打出づる波

羅浮のをとめ　隋の趙師雄が羅浮の梅花村で、月夜夢寐恍惚の間にあつた美人。

ならで、立ちならぶ花もなきは、心とかりけりと思はるゝがをかしきなり。

藤簍冊子　六卷。上田秋成の家集にして、歌文紀行等を收む。平生草する所の稿は悉く之を座右のつゞらに收む。仍つて名づく。文化三年刊行せらる。

藤簍冊子

作者　名は秋成、無腸・鶉の屋と號す。大阪の人、始め醫業を開き更に國學を攻め、歌を詠じ又文を屬して名聲大いに振ふ。享保十七年(一三九二)に生まれ、文化六年(一四六九)歿す。年七十八。

一　鶉居と名づけしは

聖人鶉居云々
莊子天地篇に「夫聖人鶉居而鷇食」とあり。聖人は居の安きを求めず。食も自ら求めずといふ意。

庵を鶉居と名付けしは、聖人鶉居鷇食の謂にあらず、鶉は常居なしといふによれるなり。此のいほりに、ある夜ぬす人入りていさゝかある物をかつぎもていにけり。あしたおもふ。

このいほり云々
攝津長柄に住めるときのこと。

われよりも貧しき人の世にもあれば、いばらからたちひまくゞるなり。

しれ〳〵し
愚なこと。

その入りし壁のこぼれを、窓に作らせて盜窓と名づけて、風を入るゝ便りよしと人にかたりしかば、あなしれ〳〵しとてあしく云ふとも聞きし。

二　うとかりし人

とし月うとかりし人のもとより、「度々おとづれすれど、聞えぬはいかにぞや。うらみつべきものぞ。」といひおこせしに、

なか〳〵にわが怠りをしるべにて
うれしき人のこゝろをぞ見し。

心とけぬ
機嫌がなほつた。

といひしかば、「心とけぬ。」となん又の便にいひこしなり。

三　沫雪

五日に云々
「太平ノ世、五日ニ一風、十日ニ一雨。風枝ヲ鳴ラサズ、雨塊ヲ破ラズ。」（王充、論衡）

五日に一たび風ふき、十日にひとたび雨ふるといふ聖の御代のためしにぞいふめるを、一年すぐるほどの序でをしも見れば、睦月立ちて人の心を春にあらたむるにはあらで、鶯の初音のおとづれ、梅の南の枝にほころびそむるとこそ見れ。」山々に霞かかれるも、夕づけて風冴え、立ちまふ雲は猶冬の名残して、沫雪の梢どもにはつ〳〵かゝれど、土に落ちては積みがてになん見ゆるも、都邊は照る日ながらに日毎うち散るを山里いかならん。

夕づけて
夕になつて。

はつ〳〵
わづかに。

思ふもすゞろ寒けしや。

四　村雨

みな月立ちぬれば、峰なす雲の夕ごとにたつも崩るゝも、天にますいづれの神のたくみならん。蟬なく木かげのやどりに汗をぬぐひ、岩間の清水を掬びてあかぬ人の行きつかるゝ樣なるに、風さと吹きくる後より黑き雲の追ひしきて降りくる村雨は、瓶にたゝへし水をくつがへすが如くに、「御格子おろせ、簾よ。」など立ちさうどきつゝ、見たまへれば、大庭のしらまなごは忽ち淺川の瀨に流れあひて、殿守のともの宮つこら、こゝかしこの御垣のくまぐまにはひかくるゝなど、いとめざましな。落ちたぎつ瀨の水上には、知らぬ濁の岩を越え岸を崩しつゝ水嵩まさると見しも、唯片時に流れ落ちて、水陰草の露おもげになえふし靡きあ

さうどく　騷ぐ。
しらまなご　白眞砂。
殿守のともの宮つこ　主殿寮の下部。

ひたる、けさよりの暑さ忘るゝ夕べなりけり。

五　埋火

冬は年の餘り、夜は日の餘り、陰雨は時のあまりなり。文讀む人はこの三つの餘りをもて成るといふ、世のかたり言にはいへど、老いがたぐひのおろか者は、唯徒に埋火に炭たきつぎ、春の木の芽を煎じつゝ飽かず啜ろひ居る。「おのれは何をして齡たもつらんとは思ふものから、眼くらく氣落ち盡きて、何をか讀み何をか書かん。雨をなつかしき物にするは、家富み人多くもたりて賑はしきあたりにも、友垣の訪ひくる道をたち、家の業などもさへられて宿にのみこもりをり、文をよみてはいにしへを偲び、鳥の跡はかなう書きすさび、或はいつき娘に琴かきならさせ、酒あたゝめ、よきものとりなめて、日ねもす夜すがらならむいとた

三餘　冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘。
春の木の芽　菜のこと。
さへられて　さまたげられての意。
鳥の跡　帝王世紀に、「黃帝ノ史官蒼頡、像ヲ鳥跡ニ取リ始メテ文字ヲ作ル。」とある。
いつき娘　愛娘。

のしき。

人待たぬ「已ニ足リテ外ニ待ツ無シ」（韓愈原道）

石彈偏突　いしはじき、へんつき、貝合、何れも遊戯の名、偏突は漢字の偏をかくして旁のみを見せてその字をあてあふ遊び。

目なし鳥の今の身　目なし鳥の如く失明した今の我が身。

六　人またぬ家

人待たぬ家には若き女どもまどゐして、古代の繪ども卷きかへしつゝ、あるは石彈、偏突、貝合などして遊ぶもいとなまめかし。かゝる夜にこそぬす人どもはたよりよしとや下ゐみしつゝ打ち入らめ。あはれ〳〵老いが貧しき庵にはほしきものもたらねば、かれら入りてぬすまんともせず。燈火かゝげあかし、文よみ手ならひはかなう書きすさびて、あかとき知らずおきあかしたる昔のしのばしきは、林にやどる目なし鳥の今の身のうきことになん。

まうけ　準備。

ゆほびかに　ゆたかに。

てうずるいそぎ　調製する準備。

おはら・賤原　何れも山城愛宕郡に在る。

大江山　山城乙訓郡に在る。

いく野　丹波天田郡に在る。

蜀の山兀たらん云々　杜牧之の阿房宮賦に「蜀山兀、阿房出」とある。

七　年　木

あら玉の年をおくり迎ふるわざこそ、千年のいにしへ今のうつゝ人もかはらぬよろこびはすなりけれ。春のまうけ、つかさつかさの衣はかまの色あひ、ゆほびかにあらたならんがめでたし。民草もおのがほど〳〵につけて、染めぬひする、めでたし。貧しきは解きあらひてうずるいそぎのあはれながら、そもよろこびする心ばへなんおろそかならずめでたし。よね積みはえ、もちひ臼つき、海のもの山のもの、何くれとおくりかはす、あかずたのしき。おはら・賤原・大江山・いく野の道を都にかづきもてはこぶ年木のにぎはしきを見れば、蜀の山兀たらんといひしをさへおぼゆるかし。

月も流れを云々
鴨長明の「石川や瀬見の小川の清ければ月も流れを尋ねてぞすむ」から來てゐる。
月見れば云々
大江千里「月見ればちぢに物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど。」
竹の中より云々
竹取物語の中のかぐや姫のこと。

八月あかき夜

月あかき夜を誰かはめでざらん。ふん月望のこよひ、庵を出でてわづかに杖をひけば、鴨の河づらなり。雨ふらぬほどなれば、月も流れを尋ねてやすむらん。おとをしるべにとめくれば、むべも清しとて人々手にむすびなどして遊ぶ。風高く吹き、雲消え、影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき。月見ればすゞろに物の悲しきぞとは、竹の中より生れ出でし貌よ人の天にいまやの別れをしむにこそ。

閑田耕筆　四卷。伴蒿蹊の隨筆にして天地・人・物・事の四部に分ちて記す。天保十年刊行せらる。

閑田耕筆

作者　名は資芳、蒿蹊また閑田子と號す。近江八幡の人。國學の造詣深く、又文章和歌に長じ、名聲一時に鳴る。享保十八年(一三九三)に生まれ、文化三年(一四六六)歿す。年七十四。

一　蒲柳の資

おのれ幼より蒲柳の資にて秋冷を畏るゝ故に、月を賞するは文月にますかげなしと思へり。されば或る年の秋、

名にしおふ葉月長月の月はあれど
　月はふづきのなかぞらのつき。

と戯れしが、おもふに東坡の前赤壁賦も七月既望なり。又この頃一友人の示せる楊萬里が詩に、

月色如レ霜不レ粟肌　月光如レ水不レ沾(ウルホサ)レ衣
一年沒(ナシスクレタルハ)レ賽中元節(ヨリ)　政(マサニ)是初涼未レ冷時。

人情はひとしきものなりと、これを聞きて感じぬ。さるに或る人いふ、「七月は猶晝の暑きからに、月を見ても照日の思ひあり。吳牛の喘ぎも吾にひとしきか。」といへり。これはまた暑さを憎むの甚しきによるべし。

前赤壁賦云々　「壬戌之秋、七月既望」とは同賦最初の句である。

楊萬里　宋の人、字は、廷秀、孝宗に仕ふ。

吳牛の喘ぎ　吳牛は水牛である。熱を畏るゝこと甚しく、月を見ても日かと疑ひて喘ぐといふ。

二　風　習

風習といふものはいかにともすべからず。唐山にて國々の風を論ずるごとく、吾が朝にても大國の人は氣象おのづから優に、小國の人は逼れり。或はその領主勢あれば土民驕泰に、勢なければ畏縮す。海濱の人は散漫に、山中の人は儉素なり。市井の人は黠智多く、油滑に、僻境の人は魯直にして偏窄なり。孔子曰はく、「里仁爲(ス)レ美(ト)。擇(ンデ)不(ル)レ處(ラ)レ仁焉(ソ)得(ン)レ知(ン)。」と。これ地によりて氣を移すの由なり。論語徵に里の字を居の如くなして見るべしといへるも、亦理あれども、唯字のまゝに見ればかくのごとし。

唐山にて云々　支那に國風といふは、その國の風俗歌謠のことである。諸侯之を采つて天子に貢する。天子その俗尙を考へて政治の得失を知る。

孔子曰く云々　論語里仁篇にある。

論語徵　荻生徂徠の著、十卷ある。

三　緣あるとなきと

菅神　菅原道眞。

道風・佐理・行成　小野道風、藤原佐理、藤原行成何れも能書家、世に三蹟と稱せらる。

世々の人、後世に緣あるあり、緣なきあり。さばかりの人も學者すら記得せざるは緣なきなり。緣あるの至極は、束帶の像は必ず菅神なりとおぼえ、行脚の僧の像は必ず西行法師なりとおぼゆ。書を學ぶ兒童等菅神を崇めて、道風・佐理・行成の諸公をいはず。義經は稱へて範賴はいはず。弘法大師の奇特を仰ぎて、傳敎大師の德を擧げず。この類いくらもあるべし。

四　茫古が言

三十年前茫古といへる畫人ありしが、長崎に學び京に住めりき。その人業をつぐべき弟子なく、纔かに貧生の扇面を畫きて食料に充てたしと願ひし者兩人あり。又この人を信じて、とかくの家事をも心を付けてまかなひし富商の弟子一人ありしのみ。その言に曰はく『おのれは弟子をとること嫌ひなり　その故は初學のほどは夜晝となく入り來て學ぶが、やゝ筆力も出來、人にも知らるゝ程になれば、誰が弟子といはるゝを憎みて、他人、師の事をとへば「その人ももとは知る人なりし」などよそ事にいひなすもの、自他の上に數多知れり。それに懲りたり。』といはれき。その後、畫には限らず、萬の藝能についてかうやうの人共を見きくにつけて、この茫古が事を思ひいでぬ。この弟子といふものの意いかにぞや。師に及ばざるは論なし。もし藍より青く、水より寒き程ならば、かへりて手がらといふべきものを、大かた世の人も誰が門人なりといひはやすを、いな〳〵さらずといひて、しひて人の口を塞がんとすとも得べからず。畢竟その心術のあしきを憎まるゝが損なりといふことを知らずや。悲むべし、吾が才能を售らめや〳〵とかまへて、かへりて滯貨となりぬ。

藍より青く　荀子勸學篇に曰く、「君子曰ク、學ハ以テ已ムベカラズ、青ハ之ヲ藍ヨリ取リテ藍ヨリ青ク、冰ハ水之ヲ爲シテ、水ヨリ寒シ」と。

滯貨　うれずに殘つてゐる品物。

五　茶の湯

茶の湯の益は、いとふつゝかにあら〳〵しき人も、これを翫べば起ち居おとなしく、物を取り扱ふにも見ざまよくなりぬ。又主客の體節、たとへば夜會にあるじ手燭を携へ出でて客を迎へ、燭を石上などに置きて禮して退く、客その燭を取りて庭の木立など見るふりして、わざとなく主の歸る道を照らすなどやうの心づかひ、禮の實に愜ひて、此の意をめぐらさば陰德成るべし。さるに、俗流の弊風、得がたきを求め、金錢を費し、あるはまた、その産業ならぬ人も點智あればこれをもて利を射るにも及び、心ざまよからず成り行くもまゝ見ゆ。富豪の家に茶を翫ぶことを禁ずるがあるも、子孫過奢に及ばんことを懼るとなり。

ふつゝか　不躾。

その産業ならぬ人　茶道をたしなはひとしない者。

泊酒舍集　八卷は清水濱臣の文集なり。

作者　名は濱臣、江戸の醫師、通稱を玄長といふ。不忍の池畔に住せしを以て泊酒舍と號せり。村田春海に學び、最も歌文に長じ博覽洽聞の譽あり　安永五年(一七七六)に生まれ、文政七年(一八二四)歿。年四十九。

泊酒舍集

しきる　類りに打ちならす。

鱸のなます思ひいでけん人　吳人張翰、晉に仕へ、故郷の鱸を思出し官をすてて歸つた故事。

王公の位を釣り得し翁　太公望呂尚をさす。

一　擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん擣衣の音の雁がねにかよふにやあらん。あなあやし〳〵。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか、皆あらず、聞く者の心のわびしきなり。

二　漁父辭

秋吹く風に耳欹てて故郷の鱸のなます思ひ出でけん人こそ、げにさる事とは覺ゆれ。岸の額の老の浪をたゝみて、直なる針に王公の位釣り得し翁はうらやましくもあらずや。我はたゞ世を捨舟に棹さして、山陰のしづけく、水草の清からんあたりに、

息の緒をかぎり　命のあるかぎり。

秋風の云々　秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。（古今集）

半は泉に歸す　「往事渺茫都夢ニ似タリ、舊遊零落半バ泉ニ歸ス。」（詠詩集）

萩の屋のあるじ　植村正路。

息の緒のかぎり心を遣りて、うへなき樂とはなしぬべきぞかし。

三　筆の跡を見てなき人をしのぶ

此の夏は、例よりも照りはたゝきて、いと堪へがたければ、何くれとなすべきわざもうちおきて、門守る犬のやうに喘ぎのみ暮しぬるを、いつしか秋風のそよと耳驚かすに、徒にかくてのみやはとて、ひぢ近なる厨子どもより始めて、塗籠の書ら數の限り引廣げて、日に曝し風入るゝに塵箱の底にこめられてしみといふ蟲の住みかとなりにし反古どものいと多かるを、かゝる序に一つ二つととりつゝ開き見るに、早くより睦びかはしたる友垣の言の葉どもの中を、およびを折りて其の人彼の人と數ふれば、半は泉に歸すとうちうめかるゝ中には、此の頃まで花にとひ月に向ひし萩の屋のあるじのなん、わきて數多く見出でたる。昨日

ありのすさびにあるにまかせて。いつもあると思つて氣にとめないこと。
水莖の跡　筆跡。

まではありのすさびに見棄てたりしを、今よりは千とせのかたみと思ふに、そゞろうちまもられて流れ落つる涙の、水莖の跡にそゝぎそふる心地すれば、

残れとて残しも置かぬ筆の跡を
形見と知らで形見とぞみる。

いでや光異なる玉の聲はうづもれぬ名と共に後の世まで聞えて傳はらんものから。

檀園文集

檀園文集　三卷。は國文・和歌の名流、中島廣足の文集なり。文は堅實なる實情に發し、秩序整然、筆力勁健、而して風韻興趣に富めり。

作者　名は廣足、檀園・黄口・蛙廡等と號す。熊本の人、家塾を長崎に開く。後大阪に住む。著書多し。寛政四年(一七九二)に生まれ、元治元年(一八六四)歿。年七十三。

一　燕

いとうらゝかなる日、思ふどちうちつれゆく大路に、つばくらめのこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつべくて、いとをかし。雨のなごりのなほ乾かぬ方などに下りゐて、ひぢを含みつゝ、童部の走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくもをかし。梁に巣くひて、いつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ鳴きさわぎたるさまは、いみじうこそあはれなれ。

ひぢ　泥。

二　蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむとくにて、いと堪へ難かりしを、やう〳〵日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風の

むとく　無德。見るかひなきこと。わびしげなること。

いと涼しきに、ゆあみなどして立出づれば、月の影さへほのめきて、晝の苦しさもかつ〴〵わすられぬ。やゝ遠くゆくほど、道の傍なるしづが伏屋より煙のいとしげく立上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きなる火桶に、何にかあらむ青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたあふぎちらすは、いとあつかはしく、見る目もいぶせくて、急ぎ歩みすぎて見れば、やう〳〵薄らぎゆく煙の杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてをかしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にも書かまほしき景色になむ。

かつ〴〵　辛うじて。

霞おぼえて　霞に似て。

かはほり　蝙蝠。

三　夏旅

晝のまは暑さ堪へがたくて、はか〴〵しうもえあゆまねば、朝影の程にこそはとて、鳥の聲とともに起きいでて行くに、有明の

月くまなく澄みわたり、竝木の松風涼しく吹通りて、ほろ〳〵とこぼるゝ露の袂にかゝれるも、いと心地よし。道のかたへなる田の面に人の音なひのするを、河かと見れば、車の上に登りゐて水蹈み入るゝなりけり。我が旅のうさも聊かなぐさみぬ。程なく明けゆく横雲の空に、山鴉飛びわたりつゝ茅蜩の鳴出でたるなど、いみじうをかしきに、稲葉の露の所せきまで置きわたしたるが、葉末に上りてかつ〴〵こぼるゝさま、見る目もいと涼しくおぼゆ。さし出でたる日影のやう〳〵高くなりゆくに、けふ越ゆべきなにがしの山路思ひやるも、まづいとくるしうこそ。

四　秋　山

雨すこしうちそゝげど、かばかり思ひ立ちつることはとて、うちつれいづ。降るともなく霽れぬるは、この頃の空のならひなめり。いとしげき草葉の露をふみ分け行くも、あながちなる山路なりや。

思ひしもしるく、いと濃く染めわたしたる紅葉の、霧の絶間より見えたるけしき、二月の花よりもとかいひけむやうに、あはれふかう身にしみて覺ゆるに、夕風寒く吹きのぼる谷のあなたに、いと細き聲にて遙かにうち鳴きたるは、鹿なりけりと思ふに、いと珍しく、人々耳立てたる程、二聲三聲鳴きそへたる、あはれいみじき山蹈のかひよと思ふに、おくれし人々もなつかしくなりぬ。

二月の花よりも云々　霜葉ハ二月ノ花ヨリモ紅ナリ。（杜牧、山行）

いみじきかひの修飾語。

五　冬　月

思ふどちまどゐして、うづみ火かきおこし、心へだてなく物語するに、いつしかさゆる夜のけはひも忘られて、窓の戸おしあくれば、宵の浮雲なごりなくはれて、雪少し降りたる庭に、月のさや

徒に寢て云々　かくばかりなしと思ふ夜を徒に寢て明すらむ人さへぞうき。（古今集、凡河内躬恒）

すさまじと云々　すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心細きものなれ。（徒然草）

興盡きて反る云云　吾本興ニ乘ジテ來リ、興盡キテ反ル、何ゾ必ズシモ安道ヲ見ンヤ。（晉書、王徽之傳）

かに照りたるが、いはむ方なくおもしろきを、「かくてのみやはあるべき、徒に寢て明すらむあたりをも驚かしてむ。」とやがてうちつれつゝあくがれ出づ。

人の行きかひも絶えたる大路の、凍りわたれるをふみならす足音、我ながらいとをかしく覺ゆ。「かゝる月夜をしも、すさまじといひけむ昔の人こそ心得ね。」など、いひしろひつゝ、やゝ遠くあくがるゝに、風のいとさむく、身にしみて堪へがたければ、「興盡きて反る。」といへる故事もあなるものをとて、各立ち歸るに、「夏ならましかば、尙いづこまでかは、あくがれなまし。」と思ふも、いとをかしくなむ。

六　夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕烏も、いつしか聲しづまりて、向へる文卷もやうゝ見えずなりゆくに、心ゆくわたりはいとくちをしきものから、暫しうちおきて、端の方に出づれば、暮殘る梢どものほのかなる山の端に、僅かにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいへる鳥の、あやしき聲になきゆくが、何となくものさびしげなるを、來むといひつる友、はた暮れすぐしてやと思ふも心もとなきに、ともし火かゝげたるこそまづうれしけれ。

七　驛

治まれる世は、驛路のゆきかひも賑はゝしく、人宿す家はた建て續けて、草引き結ぶ思ひもなきものから、さすがにうちとけてしも寢られぬは、旅路の習なるべし。曉の鐘はいづこも同じ響にて、いととく立出づる旅籠馬のころゝ、枕上に聞えて心地よ

げなるに、「今日は天氣もよかんなり。何がしの浦の眺めいかにをかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは。」などいひつつ、さゝやく音のほのかに聞ゆるは、あなたに寢たる旅人なるべし。家なる人々も起出でて、朝食のことなどとかくまかなひありく程、やう〳〵物さわがしくなりて、物擔ひゆく男どもの俚謠うたふなど忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに引寄せつゝ、「馬まゐりて候。」といふは、吾が乘るべきにやと思ふもいとをかし。

たよりなき　不便な。

八　漁　村

海人の住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋どものさま、波うちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さて住みなば何心地かせましと、思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ちて、「今日はいと遲くもあるかな。」などいひつゝ、沖つ方をまぼりをり。うまごどもにやあらむ、眞砂の上を走りありきつゝ遊び居たるに、入日さしたる島蔭より、三つ二つ歸り來る舟の、舵ひき折りてほこらしげなるを、老人待ち得顏にうちほゝゑみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚によせて飛び下るまゝに、綱繰寄せなど、とかくしつゝのゝしるに、男も女も數多出で來て、大きなる籠に魚ども取り入れつゝ、擔ひもて行くさまは、さはいへど賑はしげなり。くゞつめく物もて來て、小さき魚三つ四つ乞ひもて行く童などもあり。すべて人多く立込み騷ぎて、舟のあたりかしがましく、さし寄りて覗くべくもあらず。いと長き網の、渚

まぼりをり　守り居り。

舵ひき折る　櫓もたわゝに漕ぐ。

くゞつめく物　くゞつのやうな物。くゞつは藁などで作つた袋のやうなもの。

にかけ干したるを繰りためて、取入れなど、やう〳〵靜まりゆけば、此方彼方、火ともしたる透影さへもあらはにて、いとあはれに見ゆ。

一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて、露まどろまれず。曉方隣の家々目覺してなりはひの事どもなるべし、あやしう聞き知らぬ事どもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに海人のさへづり、珍しうもをかしうも。

九　岸頭待舟

後手　後姿。

いとよき折かなとて急ぎくるに、岸さし放ちたるこそ、いみじうくちをしけれ。尙「暫し〳〵、今一人乘せてよ。」といふ〳〵走りくるもあるを、聞かぬ顏して漕ぎゆく後手は、いと憎きものから、さのみ漕返したらむには、え堪ふまじくやと思はるゝを、「あなにくの船人や。徒に人を走らせて。」と腹あしげにいひたるこそ、心地なくは見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間遠くさし分けゆくを、かなたの岸にも待遠なるけしきにたゝずみたる人あり。水上よりさし下す筏のさまいと靜かなるに中洲の渡には小さき舟繫ぎて、四手とかいふ網さしおろして、とかくするなどいとをかしく、一日もかくて見まほしう覺ゆ。後れたる人人つぎ〳〵來あひて立待つ程、やう〳〵漕ぎもて來たるこそうれしけれ。

一〇　夜學

初夜の鐘　夜八時頃なる鐘

寺々の初夜の鐘のひゞきもをさまりて、皆人もねたるにいとうれしう、ともし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知

られて、ふかき心ばへあるくだり〳〵もおのづから解き得らるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さしそへつつ見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地す。册子つくりて、をかしきふしぐ〳〵、あるはふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつゝ書きつけなどするもをかし。鳥の聲は、夜深きにやと思ふに、いととく明けはなれたる、しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。

玉襷　十一卷。平田篤胤の著。この書は毎朝神拜詞記を本文となし、それにつけてその神々の御傳、神拜の心得、また先祖の祭り方等すべて世に在る人の今日の心得を講說せられし講本をそのままに上梓したるものなり。

玉　襷

著者　平田篤胤は通稱を大角といひ、初め眞菅舍と號し、後氣吹廼舍と號す。享和元年始めて鈴屋翁の著書を見て大に古學研究の志を起す。著書頗る多し。安永五年(一七七六)に生まれ、天保十四年(一八四三)卒す。年六十八。

藤原家隆　後鳥羽帝の時の歌人、新古今和歌集を撰す。嘉禎三年卒す。年八十。

藤原定家　後成の子、歌人。後堀河帝の勅を奉じて新勅撰和歌集を撰す。仁治二年薨す。年八十。

一　ねざめしての歌

後鳥羽院の隱岐國海部郡狩田郷に儲けおきし御所に入らせ給ひて、潮の岸を洗ひ、大風の木をわたる音の烈しきを聞し召して「我こそは新島守よ澳の海のあらき浪風心して吹け。」とぞ遊ばしける。　この御歌を藤原家隆卿都にて傳へきゝて、後のたよりに「ねざめして聞かぬを聞きて悲しきは荒いそ浪の曉の聲。」と聞え上げられしとぞ。　しかはあれどこの家隆卿、又同じ世にいましける京極黄門定家卿は今の世までも、歌聖と稱せらるゝ卿等なるに漢語ながら君辱しめを受けたまひて、臣死すべき時節なりしに、この時の事におきて、此の歌聖たちの名の聞ゆる事なきは、君のさる御難をしいさゝかも憂ひ顧み奉らず、安閑無事に、歌のみ作り構へて居られしかいともいぶかしきことなり。　されば家隆卿の都より、ねざめして聞かぬを聞きててふ歌を、たよりにつけて聞え上げられし事を、歌人らはもののあはれを知りたる事にいひのゝしれど、篤胤が心には、却りて事情に通ぜざるしわざとこそ思はるれ。　これについて思ふ由あり。　そは伊勢物語に、むかし男有りけり。　歌はえ詠まざりけれど、世の中を思ひ知りたりけりと有るをおもへば、そのかみより歌よむ人のみ世の中のあはれは知りて、歌よまぬ人は世の事情にうとき物のごと言へること知らる。　されどこはうけられぬことなり。　さるは近き世の歌作りら眞の古へ學する徒に「ますらをのなすべきわざを知らであれや、手弱めもする歌よみはなぞ。」など笑はるゝを、しかすがに恥ぢわびて、古への道の奥所にわけ入りて、物のあはれを知ることは歌をよみえてこそと言ふなどもうけられず。そは歌聖と聞えし彼の卿等すら君臣の大義にくらく、物のあは

れに疎かるを、世の歌作りらよし歌をばうべ〳〵しく作りいづとも、豈道のまことのあはれを知りなむや。（卷一）

二　北條泰時

承久の亂のとき、泰時父の命そむき難く、力及ばず上洛せしが、八幡宮の前なる赤橋のもとにして、馬より下り、首を低れて信心に祈り申していはく、この度の上洛理にそむけり、忽に泰時が命を召されて、後の世をば助け給ふべし。冥慮定めて照覽あらむ。聊も私を存ぜず、もし天下の助となりて、人民を安んずべくは哀憐をたれ給へと申し、又三嶋明神の御前にて誓を立てたるも同じと見ゆ。さればその運命を天に任せて、怖々ながら、父が命ぜし如く、事行へるに思ひの外に身に難はなかりしかど、その後なほも戰々慄々と恐れ思ひて、その罪惡を贖はむと、その行をつゝしみ、神にしか誓ひ申して、出でたりし由なり。されど元より文盲不學の人なりしかば父の命なりとも、天皇の詔にはかへ難してふ重き大義を知らざる故に、斯る善心は有りながらいともかしこき大逆を犯せるなり。この人父の遺領をも己は少しく取りて、諸弟等に多く分ち與へたる無欲のしわざを始め、一世の善行を數多のせたり。されば泰時が善行をつとめしは、實には世を欺けるにあらず。父の命に順へる前非を悔いて、その逆暴を贖はむとのしわざなりけり。（卷二）

三　織田信長

信長公の朝廷を尊崇し、世のおとろへを興復せられしは、專ら正親町天皇の大詔にぞ依れりける。さてこの時は前にいへる如く、天下逆亂の極みなりしかば、皇居も荒れはて、有るか無きか

式年遷宮　天武朝の創定、信長の寄進によつて天正十三年に皇大神宮の式年遷宮があつた。

かへりまうし　神佛への御禮まゐり。

の御有樣なりしに、信長公先づ大いに皇居を造營し給ひ、亂世の中ながら、金子を都民にかして、その息を經費にそなへられ、廷臣等も窮迫して粥を食し給ひし程なりしに、この公その采田を檢して、人に賣る者は價を償うてそのもとにかへし、又二條の城趾を賜ひしにも、自らは住せられず、その處に宮室を營みて、皇太子に獻られ、猶又伊勢の兩宮は天武天皇よりこの方、廿年に一度づつ造進せらるゝ御事なるに、兵亂の爲に皇室と共に數百年衰廢せしを、信長公まうしこひて、男山の八幡宮と共に造營せられ、又武田勝賴を亡して歸陣せらるゝ時に、熱田宮にかへりまうしして、その宮を修造せられ、天正六年正月、始めて節會を行はれし時も、朝儀廢絕せしを、この公廢典を起してとり行ひ給ひしなど、人みな感歎せし由なり。　すべてこの公は小義に拘はらず、もはら大義をつとめて、まづ天下に皇室の尊きを知らしめ給へり。いともいみじきいさをしならずや。（卷二）

皇美麻命　瓊々杵尊。

四　寶

寶といふ言の始めは、天照大御神の皇美麻命に天下しろしめせと御言よさして、八咫鏡と叢雲劒とを御璽の神寶として賜へる處に見えたるが、この時よりして天の下を治め給へば、靑人草をも大御神の賜へる物と愛(はし)く思ほす意をもて、大御寶とは申すぞや。　實にも天皇のまた比類なき御寶は天下の大御民にぞありける。　但し大御寶とは農人のみにあらず、そは率土の濱國臣にあらずといふことなしといふごとく、天皇の御正朔を奉ずる人の限り、謂ゆる士農工商までにわたる稱なること、國史に王民・兆民・黔首・公民・百姓・萬民などをも、オホミタカラと訓めるにて知るべし。　然るに農人をうち任せて云ふ言の如くなれるは、謂ゆ

る四民の中に殊に多く、かつ上なく大切なる穀物を作りうゝる業に勞きて、これにて上をも養へばなり。　さればその大御寶と有らむ人はも、常にその大御寶なる由緒を思ひ、また大御神の天皇につけ奉り給へる事の本を思ひ、その御治めを辱み奉り、各、それぞれ家業を好きて怠らず勤むべきこと勿論なり。　そは士たらむ人は士の業を好き、農たる人は農業を好き、工商またそれぞれにその業をすくより、各、その業に上手となるはさる物にて、さしもその道に至り深くなりなむことは、神代の道に習ふ心ぞ本なりける。（卷八）

賀茂眞淵
國學者、縣居と號す。明和六年歿、年七十三。

五　縣主の歌の風

大人（賀茂眞淵）は歌をば殊に心高くもてつけて物せられたれば、歌一首よみ出で給へるにも、深くかうがへ數たび味ひて、によ

荷田東滿
國學者、元文元年歿、年六十九。

び出でられしなり。　歌のさまは始めと中ごろと末と三つのきざみ有りき。　初めの程は物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまにかよひて、花やぎ手弱きさまなりしを、中頃より自からの一つの姿となりて、みやびにして調高く、而も雄々しき筋をよみ出され、齡の末に至りては、いたく思ひ上りて、設けず飾らず、誰も心の及びがたき節をのみ作られきといへり。　猶他人々にも大人の歌のよみ口をほめ稱へしたぐひは數ふるに遑あらず。　されど大人の本意は荷田の翁の意をうけて、上代の道を明さむとするに、先づ萬葉集を明らむるにしくはなしと思はれし故に、稽古のために歌をも詠まれしなれど、實にはむねとせられしことにはあらざりけり。　そは我が鈴屋翁始めて大人に見えられし時に、古事記の注釋を物せむと思はるゝ由を申されしに、我も元より神典を釋かむと思ふ心ざし有るを、そはまづ漢意を清くは

なれて、古のまことの意を尋ね得ずは有るべからず。然るにその古の意を得むことは、古言を得たる上ならでは能はず、古言を得んことは萬葉をよく明らむるにこそ有れ。さる故に吾は先づもはら萬葉を明らめむとする程に既に年老いて、殘りの齡今いくばくも有らざれば、神の御典を釋くまでに至ること得ざるを、汝は年さかりにて、行さき長ければ、今より怠ることなく勤み學びなば、その志遂ぐること有るべしと諭し給へるにて知るべし。（卷　九）

神皇正統記

作者　親房は具平親王の後裔、權大納言師重の子、資性明敏、文武を兼ね備へ、後醍醐・後村上の兩帝に仕へて無二の忠臣たり。正應五年（一九五二）に生まれ、正平九年（三〇一四）薨ず、年六十三。

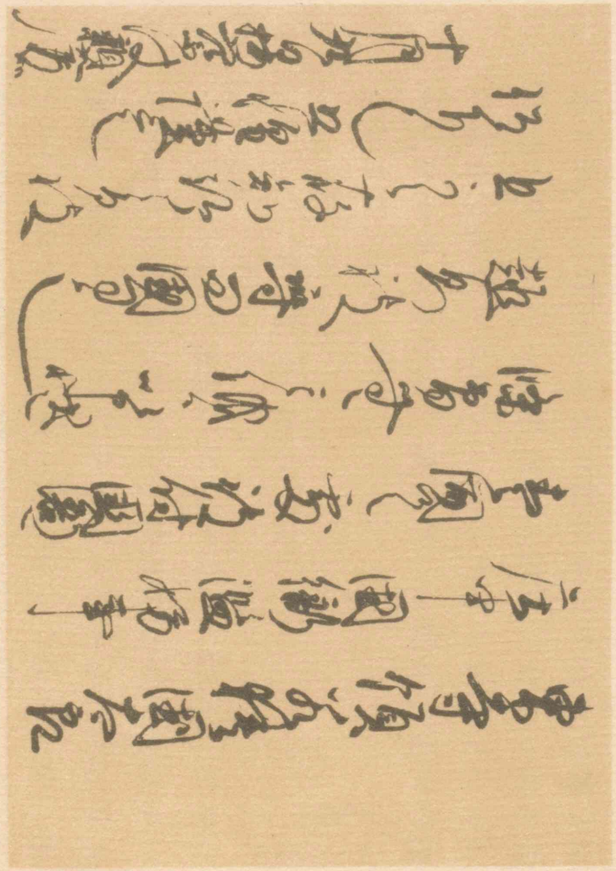
神皇正統紀　六卷は北畠親房の著。神代より後村上帝までの歷史を叙す。主として治亂興亡の由來する所を明にし、君主の德を論じ、人臣の道を述ぶ。親房兵馬倥偬の間に在りて克くこの著を成す、而もその文辭嚴正、義理明白なる、國文の範と爲すに足る。

天祖　國常立尊。
日神　天照大神。

一　神　國

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此の事あり、異朝にはそのたぐひなし。此の故に神國とはいふなり。神代には豐葦原の千五百秋の瑞穗の國といひ、又大八洲國とも、又は耶麻土ともいひ、耶麻土は後に大日本とも、日本とも大和とも書けり。此の外にも數多の名あり。秋津洲とも細戈千足國とも、磯輪上秀眞國ともいへり。

我が朝の始は天神の種を受けて國土を建立し、天祖よりこの方繼體たがはず、唯一種にましまして、天地の開けし初より今の世に至るまで、天津日嗣を受け給ふことよこしまならず。一種姓の中におきても、おのづから傍より傳へ給ひしすら、猶正しきに歸る道ありてぞ保ちましける。これ神明の御誓あらた



筆房親畠北

にして、餘國にその類なきいはれなり。抑神道の事はたやすく顯さずといふことあれど、根元を知らざれば亂りがはしき端ともなりぬべし。そのつひえを救はんために、聊か神代より天津日嗣の正理にて受傳へつるいはれを述べんことを志して、常にきこゆる事は載せず。然ればこの書をば神皇正統記とや名づくべき。

二　樣々なる道

稼穡

およそ男夫は稼穡を務めて己も食し、人に與へても飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として自らも衣、人を暖ならしむ。賤しきに似たれども人倫の大本なり。天の時にしたがひ、地の利によれり。

商沽

この外商沽の利を通ずるものあり、

工巧

工巧の業を好むものあり、これを四民といふ。

工藝。

仕官するにとりて、文武の二道あり、座

相　大臣宰相。

武を右にし　右は尚なり、史記に守成ハ文ヲ尚ビ遭遇ニハ武ヲ右ニスとある。

賦斂

して以て道を論ずるは文士の道なり、此の道に明ならば相とするに堪へたり。征きて功を立つるは武人のわざなり、このわざに譽あらば將とするに足れり。されば文武の二は、暫くも棄て給ふべからず。世亂れたる時は武を右にし、文を左にす、國治れる時は、文を右にし武を左にすともいへり。かくの如く樣々なる道をもちひて民の憂をやすめ、各の爭なからしめんことを本とすべし。民の賦斂を厚くして、自らの心をほしきまゝにすることは亂世亂國の基なり。

三　この御時よりぞ

この天皇　後三條院。

顯密の敎　天台・眞言の敎

記錄所　訴訟を裁斷する所。

この天皇、東宮にて久しくおはしましければ、しづかに和漢の文、顯密の敎までも闇からず知らせ給ふ。詩歌の御製も、あまた人の口に侍るめり。始めて記錄所といふ所をおかれて、國々の

延喜　醍醐天皇の時の年號。

天曆　村上天皇の時の年號。

衰へたることをなほされき。延喜・天曆より以來には誠に賢き御事なりけんかし。この御時よりぞ執柄の權を抑へられて、君の御みづから政をしらせ給ふことにかへり侍りにし。

塗炭

安堵

德政　仁政。

四　一臂をふるひて

白河・鳥羽の御代の頃より、政道の古きすがたやう〳〵衰へ、後白河の御時兵革おこりて、姦臣世をみだり、天下の民ほと〳〵塗炭におちにき。賴朝一臂をふるひてその亂を平げたり。王室は古きに復るまではなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵を安くし、東より西よりその德に服せしかば、賴朝なくなりても背く者ありとは聞えざりき。これにまさる程の德政なくして、いかでたやすく覆さるべき。たとひ又失はれぬべくとも、民安かるまじくば、上天よも與し給はじ。

五　天の命

下の上を剋するはきはめたる非道なり。遂にはなどか皇化にまつろはざるべき。まづまことの徳政を行はれ朝威をたて、かれを剋するばかりの道ありて、その上の事とぞ覺ゆる。且は世の治亂の姿をも能くかゞみ知らせ給ひて私の御心なくば、干戈を動かさるゝか、弓矢ををさめらるゝか、天の命に任せ人の望に從はせ給ふべかりしことにや。

下剋上　下の者が上の者にかつ。

まつろふ　服する。

干戈

六　泰時のいさを

大方泰時、心正しく政すなほにして、人をはぐくみ、物に奢らず、公家の御事を重くし、本所の煩を止めしかば、風の前に塵なくして、天の下鎭まりき。かくて年代を重ねしこと、偏に泰時が力と

泰時　北條氏三代の執權。義時の長子。仁治元年(一二四〇)卒年六十。

ぞ申し傳ふめる。陪臣として久しく權を執ることは、和漢兩朝に先例なし。その主たりし賴朝すら二世をば過ぎず。義時いふなる果報にか、圖らざる家業を始めて兵馬の權を執れりき。ためし稀なる事にや。されど誠なる才德は聞えず。又大名の下に誇る心やありけん、中二とせばかりありて身まかりけり。されども彼の泰時相續し、德政を先として法式を堅くし、己が分を量るのみならず、親族並にあらゆる武士をまでも誡めしかば、高位高官を望む者なかりき。その政次第に衰へ、終に滅びぬるは天命の終る姿なり。七代まで保てるこそ彼が餘薫なれば、憾むる所なしといひつべし。

凡そ保元・平治よりこの方の亂りがはしきに、賴朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましかば、日本國の人民いかがなりなまし。そのいはれをよく知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ武

二世　賴家。實朝。

義時　北條氏二代の執權。時政の第二子。元仁元年(一二二四)卒。年六十。

法式を堅くし　貞永式目などを作つたことをさす。

七代　泰時・經時・時賴・時宗・貞時・師時・高時。

備の勝ちにけると思へるは誤なり。所々に申せることなれど、天津日嗣は御讓に任せ、正統に復らせ給ふにとりて、用意あるべきことなり。神は人を安くするを本誓とす。天下の萬民は皆神の物なり。君は尊くましませど、一人を樂ましめ、萬民を苦しむる事は天も許さず、神も幸せぬいはれなれば、政の可否に隨ひて御運の通塞あるべしとぞ覺ゆる。まして人臣としては、君を尊び、民を憐み、天に跼り、地に蹐し、月日の照すを仰ぎても、心のきたなくして光に當らざらんことをおぢ、雨露の施すを見ても、身の正しからずして、惠に洩れんことを顧みるべし。朝夕に長田・狹田の稻の種をくふも皇恩なり。晝夜生井・榮井の水の流を飲むも神德なり。これを思ひも入れず、有るに任せて欲を恣にし、私を先として公を忘るゝ心あらば、世に久しき理あらじ。況や國柄を執る任に當り、兵權を預る人として、正路を蹈まざらんに

通塞

長田・狹田　大田・小田、田地のこと。

生井・榮井　井戸をほめていふ。

國柄　國家の政權。

おきては、いかでかその運を全うすべき。泰時の昔を思ふには、よく誠ある所ありけんかし。子孫はさほどの心あらじなれど、堅くしける法のまゝに行ひければ、及ばずながら、世をも重ねしにこそ。異朝の事は亂逆にして紀律なきためし多ければ、例とするに足らず。我が國は神明の誓いちじるしくして、上下の分定まれり。しかも善惡の報明かに、因果の理空しからず。且は遠からぬ事どもなれば、近代の得失を見て將來の鑒誡とせらるべきなり。

七　謬舉戸祿

官位は、天文に象り地理に則りて各司る方あれば、その才なくては任用せらるべからざることなり。「名と器とは人にかさず。」ともいへり。「天のつかさに人それ代る。」ともいひて、君のみだり

謬舉戸祿　謬舉とはみだりに人を舉用すること。戸祿とはその職をつとめ、すして、唯その祿を食むこと。

天文に象り云々　周禮に、天地春夏秋冬にあてて官を立てたること見ゆ。又三台星・九星に象りて、三公九卿を置くなどといつてある。

名と器とに惟名與器不可以假人（左傳、孔子の語）天のつかさに「天工人其代之。」（尚書）先づ德行を選叙、令に「凡應選者、皆審狀迹銓擬之日、先盡德行、德行同取才用、才用同取勞効、取高者、才多者」とある。四善をとる考課令に「德義ノ聞ユル有ル者ヲ一善ト爲ス。清慎顯著ナル者ヲ一善ト爲ス。公平稱スベキ者ヲ一善トナス。恪勤懈ラザル者ヲ一善トナス」とある。格條格は律令のある上に臨時に達せらるゝ法令である。厠養飯たき、小使などの賤しい者。

に授くるを謬舉とし、臣のみだりに受くるを尸祿とす。謬舉と尸祿とは國家のやぶるゝ階、王業の久しからざる基なりとぞ。

八　任　用

昔、人をえらび用ひられし日は、先づ德行をつくす。德行おなじければ才用あるを用ふ。才用ひとしければ勞效あるをとる。又「德義、清慎、公平、恪勤の四善をとる。」とも見えたり。又格條には「朝に厮養たれども夕に公卿に至る。」といふことのあるも、德行才用によりて不次に用ひらるべき心なり。

九　人臣の道

およそ王土にうまれては、忠をいたし命を棄つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども後の人を勵まし、その迹をあはれびて賞せらるゝは君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることは誠にありがたきならひなりけむかし。

中古までも人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば必ずおごる心あり、はたして身をほろぼし家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

一〇　亂臣賊子

言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも君をないがしろにし、人におごることはあるべからざることにこそ。堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣賊子といふもの

言語は云々易の繫辭傳中にある語。

あからさまにもかりそめにも。

堅き氷は云々「履霜堅氷至。」（易經）

は、そのはじめ心詞を愼まざるより出でくるなり。

二　獲　麟

八月十六日
延元四年。

獲麟
孔子春秋を作つて「魯哀公十有四年春西狩獲麟」で筆をとめた。

さても八月の十日あまり六日にや、秋霧におかされさせ給ひてかくれましぬとぞ聞えし。寢るが中なる夢の世、今にはじめぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の迹さへとゞこほりぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、茲にてとゞまりたくはあれど、神皇正統のよこしまなるまじきことわりを申しのべて、素意の末をもあらはさまほしくて、しひて記しつくるなり。

十訓抄

十訓抄　三卷。本邦に於ける教訓書の嚆矢と稱せらる。全編十段より成り、各段には先づ概論を掲げ、次ぎに古今和漢の實例を擧げて讀者の興味に訴ふ。

著者は或は橘成季なりといひ、或は菅原爲長なりといひ、明かならず。その建長四年(一九一三)に成れるは、序によりて知らる。

品を別たず　身分に拘らず。
賢なるは云々　「智者モ千慮ニ必ズ一失有リ、愚者モ千慮ニ必ズ一得有リ（史記、淮陰侯傳）」
しかるに　それについて。
二つの跡　賢愚兩者の事蹟
心をつくる便　注意の材料。
三餘の窓　冬者歲之餘、陰雨者日之餘、夜者時之餘。（魏略）學びの窓の意。
となり　といふ目的である。
和字を先として云々　假名文を主として書き必ずしも文の「元長になる」を意としない。

一序

それ世の中にある人、事業しげきふるまひにつけて、貴き賤しき品を別たず、賢なるは得多く、愚なるは失多し。しかるに今何となく聞き見るところの、昔今の物語を種として、よろづの言の葉の中より、いさゝかその二つの跡を取りて、善き方をば之をすすめ、惡しきすぢをば之を誡めつゝ、未だ此の道を學び知らざらん少年の輩をして、心をつくる便となさしめんが爲に、試みに十段の篇を分かちて十訓抄と名づく。すなはち三卷の文として、三餘の窓に置かんとなり。その詞、和字を先として必ずしも筆の費えを鑑みず、見る者の目安からんことを思ふ故なり。その例、漢家をついでとして、博く文の道を訪はず、聞く者の耳近からんことを思ふ故なり。すべて之をいふに空しきことばを飾ら

漢家をついでとして　支那の例を補助の役として。
博く文の道云々　ひろく群書を探り索めない。
道の傍の云々　道ばたの碑文に見るやうな過褒の文を弄したくない。
秋の螢の云々　十分に學問を修めてるないから、詩文の才に乏しい。
春の鶯の云々　音曲を學ばないから管絃の道にも暗い。
あまたの露霜　多くの年月。
梓弓　引くにかけた枕詞。
ならし　なるらし。なりといふ位のところ。かくいふは當時における一種の語法。

ず、たゞ實の例を集む。道の傍の碑の文をば冀はざる心なり。

但し拙き身を顧みるに、秋の螢の光を聚めずして、風月の望に暗く、春の鶯の囀を學ばざれば、絲竹の曲にうとし。藝なく能かけたり。なす事なくして、徒にあまたの露霜を送るばかりなり。かゝるにつけては、藻鹽草かき誤れる言の葉も數つもり、梓弓引きみん人の嘲も外れ難く覺えながら、志のゆく所たゞにはいかがやまんとならし。

二　一顰のあやまり

騏驥といふ貴き獸も、おのづから一顰のあやまりなきにあらず。人とても爭でかその理を離れむ。しかれば文にいへるが如く、「小過をゆるして賢才を見るべし」となり。その咎あまたゝびに及ばばなだむるに力なし。たゞし君をはかりて身の要を

小過をゆるし
「仲弓政ヲ問フ。子曰ク、有司ヲ先ニシ、小過ヲ赦シ、賢オヲ舉ゲヨト。」（論語子路篇）

佞人朝にあれば
姦人朝ニ在レバ、賢者進マズ。（孝經諫諍篇）

讒諛の甚しき
「夫レ孔墨ノ辯ヲ以テスルモ、自ラ讒諛ヲ免ルル能ハズ。」（前漢書鄒陽傳）

かまへ、かたへを欺きてその祿を望むやからをば深く退くべし。その故は「佞人朝にあれば忠正のものすゝまず。」といひ、「讒諛の甚だしき、孔墨のさきらもまぬがれ難し。」なども聞ゆれば、不忠の輩は更になさけのかぎりにあらず。（第一、可レ定二心操・振舞一事）

三　驕慢を先とす

人の世にあるならひ、驕慢をさきとして、よく穩便なるは少し。あるひは自由の方にておだやかならず。これはわが涯分をはからず、さしもなき身を高く思ひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。あるひは偏執の方にてかたくなり。これはわが思ひたることをいみじうして、人のいふことを用ひざるなり。あるひは世にかはれる振舞あり。これは昔をのみいみじと思ひて、今の世にしたがはぬなり。或は折節に似ぬをこあり。これは内々よくなれにしかばと思ひて、はれに出でて人をならし、もしは打解け遊ぶ所に交りて、われは未だみだれぬまゝに、ことうるはしう紐さしかためて、人をしらかし、その座をさますなり。（第二、可レ難二驕慢一事）

四　笑の中の劍

笑の中の劍
「凡ソ意ニ忤フ者ハ皆之ヲ中傷ス。時ニ義府ノ笑中ノ刀ト號ス。」とある。さらでだに
前項を受けていふ。

人は慮なく、言ふまじき事を口とく言ひ出し、人の短をそしり、したる事を難じ、かくす事を顯し、はぢがましき事をたゞす。これらはすべてあるまじきわざなり。われは何となく言ひ散らして思ひもいれぬ程に、言はるゝ人は思ひつめて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも與へられ、身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劍はさらでだにも恐るべきものぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺あら

はるゝものなり。大方口輕きものになりぬれば、「某にその事なきかせそ、彼の者になし見せそ。」など云ひて、人に心をおかれ隔てらるゝ、口惜しかるべし、又人のつゝむ事のおのづから洩れ聞えたるにつけても、かれ話されしなど疑はれむは面目なかるべし。

（第四、可レ誡二人上多言等一事）

五　思はしき友

はかなくうち語らはむ友なりとも、よくその人を擇ぶべし。「薫蕕器を異にすべし。」となり。花のもとに春ばかりをちぎり、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは忘れがたく思ひ出でらるゝものなり。すべて友を語らふには隔つる心なきを德とす。ゆめ〳〵心惡しからむ人には伴ふべからず。芝澗にすみし四人の翁、竹林にこもりし七賢の類、さこそ思はしき友なりけめ。（第五、可レ選二朋友一事）

薫蕕器を異にす　「顏淵曰ク、薫蕕器ヲ同ジクシテ藏セズ。」（孔子家語）

四人の翁　商山の四皓ともいふ。東園公、綺里季、夏黃公、甪里先生。秦の人々。

七賢　嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉令、王戎、阮咸。何れも晉の人。

六　思ひ立ちたる事を

人の習にて、思ひ立ちたる事を諫むるは心づきなくて、言ひかはす人は心にかなふやうにも覺ゆれば、天道はあはれともおぼすらめど、主人の惡しき事を諫むるものはかへりみを蒙ることありがたし。さてする事のあしき樣にもなりて、靜かに思ひ出づる時は、その人のよく言ひつるものをと思ひ合はすれども、又心の引く方につきて思ひたる事のある時は、むづかしく又諫めむずらむとて、此の事を聞かせじと思ふなり。これはいと愚なる事なれども、皆人の習なればはらくろからず、又心づきなからぬ程にはからふべきなり。（第六、可レ存二忠信廉直旨一事）

心づきなし　氣にくはぬこと

かへりみ　眷顧。

思ひ出づ　反省する。

はらくろからず　惡意をはさまず

七　物に堪へ忍ぶべし

萬の事を思ひ忍ばむは、優れたる德なるべし。人の心の中に諸〻のあしき事をのみ思ふ、これを忍ばざるは淺ましかるべし。人の身の上にさま〴〵の苦あり、これを忍ばざるは世に立ちめぐるべからず。中にも年若きともがらは、飢を忍びて道を學び、寒さを忍びて君に仕へつゝ、家を起し身を立つるはかりごとをすべきなれば、何事につけても、かた〴〵物に堪へ忍ぶべきなり。

（第八、可レ堪二忍諸事一事）

八　物うらみ

人は心にあはぬ事のあればとて、うちたのむ人にもあれ、相親しき中にもあれ、物うらみの先立つまじきなり。たとひ理運の

うちたのむ人　自己が頼りにしてゐる人。

事の相違もいでき、約束の旨の變改あるにても、さる樣こそあるらめと、心ながく忍び過ぐしたらむは、くねり腹立ちたらむよりも、なか〳〵恥かしくいとほしくも覺えぬべきを、かなはぬものゆゑ、いちはやく振舞へば、却りてしらけもし、又はかなきふしによりて、大いに悔しき事も出で來るなり。

（第九、可レ停二懇望一事）

くねる　すねかこつ。

九　其の道々の家

本より其の道々の家に生れぬるはさる事なり。さなき類も程々につけて能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者、藝おろそかにして氏をつがぬ類あり、道にあらざる類、能により て道に至る德もあれば、氏をつがむがため、道に至らむが爲に、彼も是もともに勵むべし。

（第十、可レ庶二幾才能藝業一事）

其の道々の家　その〻の專門の家。

氏をうけたる者　世職ある家の者

一〇　箕裘の業

世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ、道々の才藝も又父祖には及び難き習なれば、藍よりも青からむ事はまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕裘の業をつがざらむ、口惜しかりぬべし。（第十、可レ庶二幾才能藝業一事）

箕裘の業　書言故事に「父祖ノ所業ヲ承クルヲ箕裘ノ業トイフ。」列子に「良弓ノ子ハ必ズ先ヅ箕ヲツクリ、良冶ノ子ハ必ズ先ヅ裘ヲツクル。」と弓人の子、冶工の子各先づその父の業を倣ふをいふ。

方丈記　一卷は鴨長明の著にして日野の外山に閑居せる時、年來見聞せる事どもを綴れるもの、流麗の筆致誠に隨筆の上乘と謂ふべきなり。建保（一八七三―一八七八）年中の作なるべしといふ。

方丈記

著者　長明は賀茂神社の禰宜長繼の子、生死の年月日不詳なれど、一説に久壽元年（一八一四）に生まれ、建保四年（一八七六）六十三歳にて歿せりと云ふ。

ゆく川の流は
子川上ニ在リテ曰ク、逝ク者ハ斯ノ如キカナ、晝夜チ舍カズ。（論語、子罕篇）

一　ゆく川の流

ゆく川の流はたえずして、しかも元の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え且結びて、久しく止まる事なし。世の中にある人と住家と亦かくの如し。玉敷の都の中に、棟を竝べ甍を爭へる高き卑しき人の住居は、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、昔ありし家はまれなり。あるは去年燒けて今年は造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人も多かれど、古見し人は、二三十人が中に僅に、一人二人なり。朝に死に夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去るを。又知らず、假のやどり、誰がために心を惱まし、何によりてか目を悅ばしむるを。その主人と住家と無常を爭ふさま、いはゞ朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり。殘れりといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて、露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

同じ年の水無月
治承四年六月二日。
嵯峨天皇の御年云々
平安奠都は桓武天皇の延曆十三年であるから、これは疑はしい。或は宮城の落成をさすのかも知れない。
難波の京
福原の都をさす
官位に思をかく
官位を得んとの志望をもつ。

二　治承の遷都

またおなじ年の水無月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思ひの外なりしことなり。大かたこの京の始を聞けば、嵯峨天皇の御時、都とさだまりにけるより後、既に數百歲を經たり。ことなる故なくてたやすく改まるべくもあらねば、これを世の人、たやすからず愁へあへるさまことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、御門より始めたてまつりて、大臣・公卿、悉く攝津の國難波の京に移り給ひぬ。世につかふる程の人、たれかひとり故郷に殘り居らむ。官位におもひをかけ、主君の蔭をたのむ

期する所なし　將來に期待のないこと。

今の京　福原をさす。

かの木の丸殿　齊明天皇が三韓の背いた時筑紫に幸せられ、筑前の朝倉山に行宮を御建てになつた。それが丸木のまゝの假宮であつたから、かう云ひ傳へてゐる。

程の人は、一日なりともとく移らむとはげみあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なきものは、うれへながらとまり居たり。軒をあらそひし人のすまひ、日を經つゝ荒れ行き、家はこぼたれて淀川にうかび、地は目のまへに畠となる。人の心皆あらたまりて、たゞ馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時おのづから事のたよりありて、攝津の國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすしくて、鹽風ことにはげし。内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なか〳〵やうかはりて、優なるかたも侍りき。日々毀ちて川もせきあへずはこびくだす家は、いづくに造れるにかあらむ。猶空しき地は多く、造れる家は少し。ふる

てぶり　風俗。

同年の冬　治承四年十二月、安德天皇福原から京都に還御あつたことをいふ。

茅をふきて云々　堯ノ堂、高サ三尺、土階三等、茅茨剪ラズ、采椽刊ラズ。（墨子）

煙のともしき云云　仁德天皇の御事をさす。

鄕は既にあれて、新都はいまだ成らず。ありとしある人みな浮雲のおもひをなせり。もとよりこの所に居たる者は地を失ひて愁へ、今うつり住む人は土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乘るべきは馬にのり、衣冠布衣なるべきはおほく直垂を着たり。都のてぶり忽に改まりて、たゞひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心もをさまらず。民の愁つひに空しからざりければ、同年の冬、なほこの京にかへり給ひにき。されどこぼちわたせり・し・家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにしも造らず。ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐みをもて國を治め給ふ。すなはち御殿に茅をふきて、軒をだにもとゝのへず。煙のともしきを見給ふときは、かぎりあるみつぎ物をさへゆるされき。これ、民を惠み、世を

たすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさまむかしになずらへて知りぬべし。

三　出家の動機

すべて世のありにくきこと、我が身とすみかとのはかなくあだなるさま、かくのごとし。いはんや、所により、身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あげて數ふべからず。もしおのづから身數ならずして、權門のかたはらに居る者は、深くよろこぶことはあれども、大いに樂しぶにあたはず。歎きある時も、こゑをあげて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをのゝくさま、たとへば雀の鷹の巣に近づけるが如し。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつつ出で入る。妻子・僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人

すぼき姿　みすぼらしい姿。

念々に動く　見るもの聞くものにつけて心のうごくこと。

はごくむ　はぐゝむに同じ

たまゆらも　しばしも。

のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狹き地に居れば、近く炎上する時、その害をのがるゝことなし。もし邊地にあれば、往反のわづらひ多く、盜賊の難はなはだし。又勢あるものは、貪欲ふかく、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あれば恐れ多く、貧しければなげき切なり。人をたのめば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に從へば、身くるし。又從はねば、狂へるに似たり。いづれのところを占め、いかなる業をしてか、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

わが身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所にすむ。その後、緣かけ、身おとろへて、偲ぶかたぐ〳〵しげかりしかど、つひにあととむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これを、ありしすまひになずらふるに、十分が一なり。

たづき　たより。

白浪　盗賊。

世をそむく　浮世の交を絶つ。

執　執著。

大原山　山城國乙訓郡。

末葉のやどり　晩年の住家。

たゞ居屋ばかりを構へて、はか〳〵しくは屋を造るに及ばず。わづかについひぢをつけりといへども、門建つるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり、風ふく毎に、危からずしもあらず。所は川原ちかければ、水の難もふかく、白浪の恐れもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過ぐしつゝ、心をなやませる事は、三十餘年なり。その間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめむ。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。

四　末葉のやどり

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べ

旅人の一夜　亦猶ホ行人ノ旅宿ヲ造リ、老蠶ノ獨繭ヲ成スガ如シ。（慶滋保胤、池亭記）

打覆　屋根。

車の力をむくゆ　車代を拂ふ。

ることあり。いはゞ旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、住家は折折にせばし。その家の有樣世の常ならず、廣さは僅かに方丈、高さは七尺ばかりなり。土居を組み、打覆を葺きて、繼目ごとに繫金をかけたり。もし心にかなはぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、いくばくの煩かある。積む所僅かに二輛なり。車の力のむくゆる外は、更に他の用途いらず。

五　外山の四季

その處のさまをいはば、南に筧あり。岩をたゝみて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふにともしからず。名を外山といふ。まさきのかづら跡をうづめり。谷しげけれど西は晴れ

紫雲云々　念佛修業をする者は臨終に三尊が紫雲に乘つて極樂から迎へに來るといふ。

たり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにて、西方ににほふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに、死出の山路をちぎる。秋は茅蜩の聲、耳にみてり。うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、亦恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨りをれば、口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に往きかふ舟をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督の流をならふ。もしあまりの興あれば、しば〳〵松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむ

あはれむ　賞する。

口業ををさむ　一切衆生禍從ノ口生。（報恩經）

跡の白波　世の中を何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟の跡の白波。（拾遺集、沙彌滿誓ノ滿沙彌、笹ノ朝臣麿のこと。

風情をぬすむ　風流をまねる。

潯陽の江　潯陽江頭夜送ル客。楓葉荻花秋瑟瑟。（白樂天、琵琶行）

源都督　都督は太宰帥の唐名、源經信は太宰權帥に貶せられた。

流泉の曲　流泉・啄木の二曲は仁明帝の御代、掃部頭貞敏が入唐して傳來した琵琶の祕曲。

ともにあらず。獨り調べ獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

六　古屋の軒

大方この處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五つとせを經たり。假の庵も、稍〻古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度度の炎上にほろびたる家、亦いくそばくぞ。唯假の庵のみのどけくして恐なし。程狹しといへども、夜ふす床あり、晝ゐる座あり。一身を宿すに不足なし。寄居蟲は小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。鳩は荒磯にゐる。卽ち人を恐

あからさま　かりそめ。ついちよつと。

寄居蟲　やどかり。

るゝがゆゑなり。我亦かくの如し。身を知り世を知れらば願はず、まじらはず、唯靜なるを望とし、憂なきを樂とす。

七　手の奴、足の乘物

すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためにはせず。あるは妻子・眷屬のために造り、あるは親昵・朋友のために造る。あるは主君・師匠、及び財寶・馬牛のためにさへこれを造る。我今身のため結べり。人のために造らず。故いかにとならば、今の世のならひ、この身の有樣、伴ふべき人もなく賴むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。それ人の友たるものは、富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると、すぐなるとをば愛せず。たゞ絲竹・花月を友とせむには如かず。人の奴たるものは、賞罰の甚だしきを顧み、恩顧の厚き

賞罰
罰には意味がない。

を重くす。更に育み憐ぶといへども、安く靜なるをば願はず。唯吾が身を奴とするには如かず。もしなすべき事あらば、則ち自ら身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ人を顧みるよりは安し。もしありくべき事あらば、みづから歩む。苦しといへども、馬・鞍・牛車と心を惱ますには似ず。今一身を分ちて、二つの用をなす。手の奴、足の乘物、よく吾が心にかなへり。又心身の苦を知れらば、苦しむ時は休め、まめなる時は使ふ。使ふとても、度々過さず。ものうしとても、心を動かすことなし。いかにいはんや、常にありき常にはたらくは、これ養生なるべし。何ぞ徒に休みをらむ。人を苦しめ人を惱ますは亦罪業なり。いかゞ他の力を借るべき。

八　三界唯一心

七珍　七寶ともいふ。法華經に「金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・真珠・玫瑰。」

分野　境遇。

魚にあらざれ云云　子魚ニ非レバ安ンゾ魚ノ樂ヲ知ラン。（莊子、秋水篇）

それ三界は唯心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍もよしなく、宮殿・樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都を出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝにをる時は、他の俗塵に着することを憐ぶ。もし人このいへることを疑はば、魚と鳥との分野を視よ。魚は水に厭かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰かさとらむ。

東關紀行

東關紀行　一卷。源親行の著といふ。仁治三年（一九〇三）八月京を出で、十餘日を經て鎌倉に入りし道中の記事、及び鎌倉遊覽の記事を載す。

文章は所謂和漢混淆體になりて、和漢書佛典等より廣く古事を引擧し、和歌と漢詩との句を自在に挿入せるなど、當代紀行文中、華實俱に存する一種なるべし。

身は浮雲に
「身ハ浮雲ニ似、鬢ハ霜ニ似タリ。」（白氏文集）

金張七葉
漢の金日磾と張安世とが天子の寵をうけて七代の末まで榮えたことをいふ。

陶潛五柳
宋の陶淵明、宅邊に五柳を植ゑて、自ら五柳先生傳を作る。官をすてて退隱した人である。

身は朝市に
文選に「小隱ハ陵藪ニ隱レ、大隱ハ朝市ニ隱ル」とある。

一　身は朝市にありて

齡は百年の半に近づきて、鬢の霜漸く冷しと雖も、なす事なくして徒らに明し暮すのみにあらず。さしていづこに住み果つべしとも思ひ定めぬ有樣なれば、かの白樂天の「身は浮雲に似たり、首は霜に似たり。」と書き給へる、あはれに思ひ合せらる。元より金張七葉のさかえを好まず、たゞ陶潛五柳のすみかをもとむ。しかはあれども深山の奥の柴の庵までも、しばらく思ひやすらふ程なれば、愁に都のほとりに住ひつゝ、人なみに世を經る道になむ列れる。これ卽ち身は朝市にありて心は隱遁にあるいはれなり。

二　まだ知らぬ道

仁治三年
四條天皇の御宇

みぎり
砌、こゝは水際の意。

木綿幣
木綿は楮の纖維で製した布又は紙。幣は玉串・注連繩などに垂でかけるもの。

思はぬ外に仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でて東へ赴くことあり。まだ知らぬ道の空、山重り江重りて、はるゞ〳〵と遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、しば〳〵前途の極なきに進む。遂に十餘の日數を經て鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊・水流の幽なるみぎりにいたる毎に、目に立つ所々、心にとまる節々を書き置きて、忘れず偲ぶ人もあらば、後のかたみにもなれとてなり。

三　尾張路

尾張國熱田の宮に至りぬ。神垣のあたり近ければ、やがて參りて拜み奉るに、木立年ふりたる杜の木の間より、夕日の影たえだえさし入りて、朱の玉垣色をかへたるに、木綿幣風に亂れたる、ことがら物にふれて神さびたる中にも、塒爭ふ鷺むらの、數も知

らず梢に來ゐるさま、雪の積れるやうに見えて、遠く白きものから、暮れゆくまゝに靜まりゆく聲々も心すごく聞ゆ。

この宮をたち出でて、濱路に赴くほど、有明の月影更けて、友なし千鳥時々おとづれわたれる、旅の空の愁すゞろに催して、哀かたがた深し。

故郷は日を經て遠く鳴海潟、
急ぐ汐干の道ぞ苦しき。

友なし千鳥　友にはぐれた千鳥。

鳴海潟　尾張國愛知郡。

四　遠江路

小夜の中山は、古今集の歌に「よこぼりふせる。」とよまれたれば、名高き名所なりと聞き置きたれども、見るにいよ〳〵心細し。北は深山にて松杉嵐烈しく、南は野山にて秋の花露しげし。谷より嶺に移る道、雲にわけ入る心地して、鹿の音涙を催し、蟲のうらみ哀深し。

小夜の中山　遠江國小笠・榛原二郡の境。よこぼりふせる甲斐がねをさやにも見しかけゝれなく、よこぼりふせるさやの中山。（古今集）

踏みかよふ、峰の梯（かけはし）とだえして、
雲に跡問ふ小夜の中山。

この山をも越えつゝ猶過ぎゆくほどに、菊川といふ處あり。去にし承久三年の秋の頃、中御門中納言宗行と聞えし人、罪ありて東へ下られけるに、この宿にとまりけるが、「昔は南陽縣の菊水、下流を汲んで齡を延ぶ。今は東海道の菊川、西岸に宿して命を失ふ。」と、ある家の柱に書かれたりけりと聞き置きたれば、いと哀にてその家を尋ぬるに、火の爲に燒けて、かの言の葉も殘らずと申すものあり。今は限とて遺し置きけむ形見さへ跡なくなりにけるこそ、果敢なき世の習、いとゞあはれに悲しけれ。

書きつくる、形見も今はなかりけり、
あとは千年と誰かいひけむ。

菊川　遠江國榛原郡。承久三年仲恭天皇の御代宗行藤原氏。

あとは千年と云云　かひなしと思ひなげちそ水茎の跡は千とせの形見ともなる。（古今六帖）

五　駿河路

清見が關
駿河國中央海岸、今の清水の港あたり。

興津
駿河國庵原郡興津町。

清見が關も過ぎうくて、須臾(しばし)やすらへば、沖の石むら〳〵汐干にあらはれて、波に咽び、磯の鹽原ところ〴〵風にさそはれて、煙たなびけり。東路の思出ともなりぬべきわたりなり。

清見がたせきとは知らで行く人も、
心ばかりはとゞめおくらん。

此の關遠からぬ程に興津といふ浦あり。海に向ひたる家に宿りて侍れば、磯邊に寄する波の音も、身の上にかゝるやうに覺えて、夜もすがら寢ねられず。

興津がたいそべに近きいはまくら、
かけぬ波にも袖はぬれけり。

今宵は更にまどろむ間だになかりつる草の枕のまろぶしなれば、寢覺ともなき曉の空に出でぬ。釘が崎といふ荒磯の岩のはざまを行き過ぐる程に、沖津風烈しきに、うち寄する波もひまなければ、急ぐ汐干の傳ひ道、かひなき心地して、ほすまもなき袖の雫までは、かけても及ばざりし旅の空ぞかしなど、打眺められつゝいと心細し。

かけても及ばざりし
思ひもかけなかつた。「かけても」は雫の緣語。

沖つ風けさあらいその岩づたひ、
波わけごろもぬれ〳〵ぞ行く。

庵原
今の駿河國庵原郡蒲原町。

庵原といふ宿の前を打通る程に、後れたるもの待ちつけんとて、或家にたち入りたるに、障子に物を書きたるを見れば、

旅衣裾野の庵のさむしろに、
積るもしるき富士の白雪。

さむしろ
寒い狹筵。

といふ歌なり。心ありける旅人のしわざにやあるらん。昔香爐峰の麓に庵を占むる隱士あり。冬の朝簾をあげて峰の雪を

香爐峯……隱士
白樂天香爐峰は支那江西省九江府にある廬山の北峯。

田子の浦　駿河國庵原郡にある勝地。

田子の浦に田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける（萬葉集、山部赤人）

貞觀十七年　清和天皇の御代。（一五三〇）

都良香　文章博士。元慶三年（一五九）卒。年三十六。

富士山の記　本朝文粹卷十二に見えてゐる。

浮島が原　駿河國駿東郡愛鷹山の裾野。

長き沼　須戸沼。

望みけり。今富士の山のあたりに宿を借る行客あり、さゆる夜、衣を片しきて山の雪を思へる、彼も此も共に心すみて覺ゆ。

さゆる夜に誰こゝにしも臥しわびて、
高嶺の雪を思ひやるらん。

田子の浦に打出でて富士の高嶺を見れば、時わかぬ雪なれども、なべてまだ白妙にはあらず、青うして天によれる姿、繪の山よりもこよなう見ゆ。「貞觀十七年の冬の頃、白衣の美女二人ありて、山の頂に並び舞ふ。」と都良香が富士の山の記に書きたり。如何なる故にかと覺束なし。

富士の嶺の風にたゞよふ白雲を、
天津乙女のそでかとぞ見る。

浮島が原は何處よりもまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へ遙々と長き沼あり、布を引けるが如し。山の緑影を沒して、

蓬萊の三つの島　渤海灣内にあつて神仙の棲處といはれる蓬萊・方丈・瀛洲・の三神山。

千本松原　駿河國駿東郡蒲原と由比との間にある松原。

千株の松の下　千株松下雙峯寺、一葉舟中萬里身。（白樂天）

空も水もひとつなり。蘆刈小舟所々に棹さして、群れたる鳥多くさわぎたり。南は海の面遠く見わたされて、雲の波、煙の波いと深き眺なり。すべて孤島の眼に遮るなし。纔かに遠帆の空につらなれるを望む。此方彼方の眺望何れもとり〴〵に心細し。原には鹽屋の煙絶え〴〵に立ちわたりて、浦風松の梢に咽ぶ。此の原、昔は海の上に浮びて、蓬萊の三つの島の如くありけるによりて、浮島となん名づけたると聞くにも、自ら神仙の棲家にやあるらん。いとゞ奥ゆかしく見ゆ。

影ひたす沼の入江に富士のねの、
けぶりも雲もうきしまが原。

やがて此の原につゞきて千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず、松遙かに生ひわたりて、緑の蔭きはもなし。沖には舟ども行違ひて木の葉の浮けるやうに見ゆ。彼の「千株の松の下、雙

峰の寺、一葉の舟の中、萬里の身。」と作れるに、彼も此もはづれず、眺望いづくにも勝りたり。

見わたせば千本の松のすゑ遠み、
みどりにつゞく波のうへかな。

伊豆の國府に到りぬれば、三島の社の御しめ内拜み奉るに、松の嵐こぐらくおとづれて、庭の景色も神さびわたれり。此の社は伊豫の國三島大明神を遷し奉ると聞くにも、能因入道、伊豫守實綱が命によりて歌よみて奉りけるに、炎旱の天より雨暴かに降りて、枯れたる稲葉も直に綠にかへりける現人神の御名殘なれば、ゆふだすき掛けまくもかしこく覺ゆ。

せきかけし苗代みづのながれ來て、
またあまくだる神ぞこの神。

伊豆の國府　今の三島郡三島町。
三島の神　國幣中社三島神社。
能因入道　俗名橘長愷、歌人。後鳥羽天皇の頃の人。
歌よみて　天の川苗代水をせき下せ、あまくだります神ならば神。
ゆふだすき　掛けの枕詞。

太平記

太平記　四十卷　花園帝の文保二年（一九七八）より後村上帝の正平二十二年に至る約五十年間の戰記なり。文辭の壯大雄渾の筆よく和漢の文體及佛語を混和して一種の文體をなし、後世太平記讀と稱する職業をさへ生じたり。

著者　については數説ありて一定せず、或は小島法師を以て作者とすれども、この一人の作りしか否かは學者の疑ふ所なり。

類火　類燒の火。
主上　後醍醐天皇。
藤房　萬里小路藤房、宣房の子、南朝の忠臣。
季房　藤房の弟。
十善の天子　十善は殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋恚・愚痴の十惡を一つも犯さぬこと。前世で十善の德を積んだものは現世で天子になるといふ佛說にもとづく。
赤坂　河内國金剛山の西麓。當時楠木正成がこゝに城をかまへてゐた。

一　寒草の御茵

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客、皆歩跣なる體にて、いづくを指すともなく足に任せて落ち行き給ふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上を扶け進らせて、前後に御伴をも申さりたりけれ。雨風烈しく道闇くして、敵の鬨の聲此處彼處に聞えければ、次第に別れ〳〵になつて、後にはたゞ藤房・季房二人より外は、主上の御手を引きまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。

如何にもして夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路をたどる

青塚　荒れた塚。
羅穀　羅は薄い絹布。穀は目のすいた薄い織物。紗の類。
多賀の郷　今の山城國綴喜郡多賀村及び井手村の地。
有王山　井手村の東にある山。

御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の傍なる青塚の蔭に御身を隱させ給ひて、寒草の疎かなるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に、山城多賀の郷なる有王山の麓まで落ちさせたまひけり。

二　たのむ蔭

藤房も季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今は如何なる目に逢ふとも逃げぬべきこゝちせざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともにうつゝの夢に伏し給ふ。梢をはらふ松の風を雨の降るかと聞しめして、木蔭にたち寄らせたまひたれば、下露のはら〳〵と御袖にかかりけるを、主上御覽ぜられて、

笠置の山　山城國相樂郡笠置山。

さしてゆく笠置の山を出でしより、
あめが下にはかくれがもなし。

藤房卿泪をおさへて、

いかにせん頼む蔭とて立寄れば、
なほ袖ぬらす松の下つゆ。

三　他郷の風

北辰の御拜　北極星を御拜せられること。

昔の玉樓金殿に引きかへて、うきふししげき竹の緣、涙ひまなき松の墻、一夜を隔つるほども堪へ忍ぶべき御心地ならず。雞人曉を唱へし聲、警固の武士の番を催す聲ばかり、御枕の上に近ければ、夜のおとゞに入らせ給ひても、つゆまどろませ給はず。萩の戸あくるを待ちし朝政なけれども、曉ごとの御勤、北辰の御拜も怠らず。今年いかなる年なれば、百官罪なくして愁の涙を

一人　主上。

竹苑　竹の園生。親王。

柳營　將軍、こゝにては護良親王。

配所の月に注ぎ、一人位を易へて宸襟を他郷の風に惱ましたまふらむ。天地開闢より以來かゝる不思議を聞かず。されば天にかゝる日月も、誰が爲にか明なることを恥ぢざらむ。心なき草木もこれを悲しみて、花開くことを忘れつべし。（卷四、備後三郎高德が事）

四　僭上の過

昔の百里奚　戰國の人。秦の穆公の相たること七年、秦をして霸たらしめた。

兵革の後、蠻夷未だ心服せず、本枝猶根を堅うせざるの間、竹苑を東國に下し奉り、已に柳營を塞外に苦しましむるの處に、尊氏超涯の皇澤に誇りて、家を興し、威を立てんと欲す。僭上無禮の過、遁るゝによし無し。（卷十四、新田足利確執奏狀の事）

五　前聖後聖一揆

昔の百里奚は穆公晉國を伐ちし時、軍の利なからむことを鑒

孟明視　百里奚の子。

前聖後聖一揆　二人の聖人の行爲の一致してゐること。

花山院　京都上京區一條にその址がある。

主上　後醍醐天皇。

楓橋の夜の泊　唐の張繼が楓橋夜泊の詩「月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。」

御枕を欹て御簾を撥げ　「遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峰雪撥簾看。」（白氏文集）

みて、その將孟明視に向つて今を限りの別を悲しみ、今の楠木判官は敵軍都の西に近づくと聞えしより、國必ず滅びむことを愁へて、その子正行を留めてなき跡までの義をすゝむ。彼は異國の良弼、これは吾朝の忠臣、時千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、ありがたかりし賢佐なり。（卷十六、正成兵庫に下向の事）

六　花山院の故宮

主上は二心あるまじきよしをば、尊氏卿さま〴〵申されたりし僞の詞を御たのみあつて、山門より還幸なりしかども、元來たばかりまゐらせむためなりしかば、花山院の故宮におし籠められさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱まさる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を欹て、楓橋の夜の泊に御あはれをそへられ、梢に餘る北山の雪に御簾を撥げては、梁園の昔の御遊に御涙を催さる。紫宸に星を列ねし百司の老臣も、滿天の雲に掩はれ、參り仕ふる人一人もなければ、天下の事いかになりぬらむと、尋ね聞しめさるべきたよりもなし。（卷十八、先帝吉野に潛幸の事）

梁園の昔の御遊　「梁ノ孝王、曜華宮ヲ作リ、兎園ヲ築キ、日ニ宮人賓客ト其ノ中ニ戈釣ス。」（西京雜記）

七　淺渚に遊ぶ時は

漢の高祖はみづから淮南の黥布を討ちし時、流矢に當りて未央宮の裏にして崩じ給ひ、齊の宣王はみづから楚の短兵と戰ひて、干戈に貫かれて修羅場の下に死し給ひき。されば、「蛟龍は常に深淵の中を保つ。淺渚に遊ぶときは漁網釣者の愁あり。」といへり。義貞君の股肱として武將の位に備りしかば、身を愼み命を全うしてこそ、大義の功を致さるべかりしに、みづからさしもなき戰場に赴きて、匹夫の鏑に命を止めしこと、運の極とはいひながら、うたてかりしことどもなり。（卷二十、義貞自害の事）

黥布を云々　史記漢高祖本紀に見ゆ。但し未央宮（漢都長安にある宮殿）は長樂宮とある。

齊の宣王　周の宣王が杜伯に射殺された事、史記周本紀の正義に出づ。齊の宣王とあるはその誤か。

蛟龍は云々　「昔白龍淸冷ノ淵ニ下リ化シテ魚トナル。漁者豫且、射テ其ノ目ニ中ツ。」（說苑）

吉野の主上　後醍醐天皇。
晏駕　天子の崩御をいふ。
大塔忠雲　中院贈太政大臣光忠の子である。
神路山　伊勢内宮の邊の山。
三明　過去、未來、現在の三世を明かに知ることなり。
萬歳の後　崩御後。

八　神路山の花

吉野の主上御不豫の御事ありけるが、次第に重らせ給ふ。玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見え給ひければ、大塔の忠雲僧正御枕に近づき奉りて、「神路山の花二たび開くる春を待ち、石清水の流遂に澄むべき時あらば、さりとも佛神三寶も捨てまゐらせらるゝことは、よも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈已にかはらせ給ひて候ふ由、典藥驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺路に赴かせ給ふべき御事をのみ、思し召し定められ候ふべし。さても最後の一念によりて三界に生を引くと、經文に說かれて候へば、萬歳の後の御事、よろづ叡慮にかゝり候はむことをば悉く仰せ置かれ候うて、後生善所の望をのみ御心にかけられ候ふべし」とぞ申されたりける。（卷二十一、先帝崩御の事）

法華經　八卷、鳩摩羅の譯。八月十六日延元三年。
中流に舟を覆して　中流失レ船、一壺千金。（鶡冠子）

九　無常の敵

主上委細に綸言を殘されて、左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑の刻に遂に崩御なりにけり。悲しいかな、北辰位高くして百官星の如くに列るといへども、九泉の旅の路には、供奉つかまつる臣一人もなし。いかんせむ、南山地僻にして萬卒雲の如くに集るといへども、無常の敵の來るをば禦ぎ止むる兵更になし。たゞ中流に舟を覆して一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消えて五更の雨に向ふが如し。（卷二十一、先帝崩御の事）

一〇　末法の風俗

天下久しく亂に向ふことは末法の風俗なれば、暫く云ふに足

延喜　醍醐帝の時の年號。

天暦　村上帝の時の年號。

筑波山　筑波山このもかのもに蔭はあれど君がみかげにますかげはなし。（古今集）

らず。延喜・天暦より以來、後醍醐天皇ほどの聖主、神武の君は未だおはしまさざりしかば、何となくとも、聖德一たび開けて、拜趨忠功の望を達せぬことはあらじと、人皆望をなしけるが、君の崩御なりぬるを見まゐらせて、今は御裳濯河の流の末も絶えはて、筑波の蔭に寄る人もなくて、天下皆魔魅の掌握に落つる世にならむずらむと、あぢきなく覺えければ、多年著きまとひ參らせし卿相雲客、思ひ〳〵に身の隱家をぞ求め給ひける。

（卷二十一、先帝崩御の事）

增鏡

增鏡　三卷二十篇は後鳥羽帝御誕生より後醍醐帝まで約百五十年間の歷史を叙す。大鏡・水鏡と併せて三鏡と稱す。全篇百餘歲の老尼の懷舊談を聞書せる體に作れるは大鏡に學びたりと見ゆ。

著者　不詳、但し元弘三年（一九九三）―天授二年（一〇三六）の四十餘年間に作成せられたりとするは學者の定說也。

鶴の林　釋迦の入滅せし沙羅樹林をいふ。釋迦入滅の時、この樹變じて白鶴のやうになつたと傳ふ。

薪盡きにし　釋迦の入滅を云ふ。

如來二傳の御かたみ　嵯峨清涼寺の釋迦如來の尊像は、印度から支那に傳へ、更に支那から我が國に傳へたものであるといふ。

嵯峨　山城國葛野郡。

常在靈鷲山　法華經の偈の句。靈鷲山は釋迦の法を說いた處。

一　きさらぎの中の五日

きさらぎの中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて、「常在靈鷲山」など心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢにもや餘りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかゝりてまゐれり。とばかりありて、「たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうちやすみなむ。坊へ行きて、みあかしの事などいへ。」とて、具したる若き女房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり。（序）

二　年のほどなど

年の程など聞くも珍らしき心地して、かゝる人こそ昔物語りもすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事の聞かまほしきまゝに、年の積りたらむ人もがなと思ひ給ふるに、うれしきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから古き歌など書きおきたるものの片はし見るだに、その世にあへる心地するぞかし。」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りし事は、こゝらの年來に、ぬば玉の夢ばかりだになくおぼゝれて、何のわきまへか侍らむ。」とはいひながら、けしうはあらず、あへなむと思へる氣色なり。（序）

こゝらの年　多くの一年。

ぬば玉の夢の枕詞。

けしうはあらず　わるくはなく。

三　四方の海波靜かに

御門ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに、ふく風も枝を鳴らさず、世治り、民安くして、あまねき御うつくしびの浪、秋津島の外まで流れ、しげき御惠、筑波山のかげよりも深し。よろ

御門　後鳥羽天皇。

あまねき御うつ

くしび云々「あまれる御うつくしびの涙八島の外まで流れ、廣き御惠の蔭筑波山の麓よりしげくおはしますと云々。」（古今集序）

づの道々に明らけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かずしらず人の口にある中にも、

奥山のおどろのしたも踏み分けて、
道ある世ぞと人に知らせむ。

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほどしるく聞えて、いといみじくやむごとなくは侍れ。（おどろのした）

四　水無瀬といふ處に

水無瀬といふ處に、えも云はずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひゞかして遊をのみぞし給ふ。所がらも、はる〴〵と川に臨める眺望いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合せられしも、とりわきてこそは、

見わたせば山もとかすむみなせ川、
ゆふべは秋となに思ひけむ。

萱葺の廊、渡殿など、はる〴〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深きみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千代をこめたる霞の洞なり。（おどろのした）

水無瀬　山城國乙訓郡。

元久の頃　土御門帝の年號

霞の洞　上皇の御所。

五　雪のむらぎえ

その御百首の歌、いづれもとり〴〵なる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に、
跡まで見ゆる雪のむらぎえ。

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけろ

目に見えぬ鬼神云々
古今集の序「和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける。……力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をあはれと思はせ云云」

ほどを推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと思ひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、げにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くてうせにし、いといとほしく、あたらしくなむ。（おどろのしたた）

六　この大臣は

この大臣は大方心ばへうるはしく、猛くもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き從ふさまも父にも超えたり。いかなる時にかありけむ、

山はさけ海はあせなむ世なりとも、
君にふた心わがあらめやも、

とぞよみける。（新島もり）

この大臣
源實朝、内大臣であつた。
よろづめやすし
萬事非難すべき點がない。

七　公曉といふ大とこ

故左衛門督の子にて、公曉といふ大德あり。親の討たれにし事をいかでかやすき心あらむ。いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣また右大臣にあがりて、大饗など珍しくあづまにて行ふ。京より尊者を始め上達部殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉に移し奉れる八幡の御社に神拜に詣づるいと嚴しき響なれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。立騒ぎのゝしるもの、見る人多かる中に、かの大德打紛れて女のまねをして白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程をさしのぞくやうにぞ見えける、あやまたず、首を打落しぬ。その程のとよみ、いみじさ思ひやりぬべし。（新島もり）

大とこ（大德）
高德の僧、こゝは只僧の義。
故左衛督
源頼家。
内大臣
源實朝。
八幡の御社
鎌倉鶴岡八幡宮

院　後鳥羽院

西おもて　西面の武士

八　忍びて思したつ事

かくて世を靡かししたゝめ行ふこともほと〳〵古きには超えたり。まめやかにめざましきことも多くなりゆくに、院の上忍びて思したつ事などあるべし。近く仕うまつる上達部・殿上人まいて北面の下臈、西おもてなどいふも、皆この方にほのめきたるは、あけくれ弓矢・兵仗のいとなみより外の事なし。劔などを御覽じ知ることさへ、いかで習はせ給ひたるにか、道の者にもやゝたち勝りてかしこくおはしませば、御前にてよきあしきなど定めさせ給ふ。（新島もり）

九　人にうしろ見えなむには

義時、泰時を前にするゑていふやう、「おのれをこの度都にまゐらする事は思ふ所多し。本意の如く清きしにをすべし。人にうしろ見えなむには、親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時、君の御ために後めたき心やはある。されば横ざまの死をせむことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再び足柄・箱根は越ゆべし。」など泣くなくいひ聞かす。（新島もり）

後めたし　後ぐらいこと。

一〇　國を爭ひて戰をなすこと

いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら、雪かきくらし風吹き荒れ、ふゞきして來し方行く先も見えず、いと堪へ難きに、御袖もいたくこほりて、わりなき事多かり、もろこしにも日の本にも、國を爭ひて戰をなすこと數へつくすべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。もしはすぢ異なる大臣、

わりなき事　たへがたく苦しいこと。

よせ　理由。

承平・天慶　共に朱雀天皇の御代。
康和　堀河天皇の御代
義親　源氏。
故院　後白河院。

さらでもおほやけともなるべきささみの、少しのたがひめに世にへだゝりて、その恨の末などより事起るなりけり。かゝるあさましきためし、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨にはかたざりき。保元に、崇德院の世をみだり給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照る御神も、御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門をまもり給はする事は強きなめりとぞ、ふるき人々も聞えし。（新島もり）

この國のあるじとして云々　後鳥羽院のことをいふ。

一　この國のあるじとして

すべて三十六年が程この國のあるじとして、萬機のまつりごとを御心一つにをさめ、百のつかさをしたがへ給へりし、その程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて、遠きをあはれび、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨のあしよりもしげければ、津の國のこやのひまなきまつりごとを聞し召すにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやう〳〵枝をつらねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空ゆく月日のかぎりしらず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵て、よしなき一ふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちり〴〵にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからことゝふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽燒く煙のなびく方をも、我がふる里のしるべかとばかり、ながめすごさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいて、いつをはてとかめぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に、世をつくし給ふべき御さまども、口惜しとい

津の國の云々　「津の國のこやとも人のいふべきに、ひまこそなけれ、葦の八重葺。」（後拾遺集、泉式部）昆屋野は攝津國島上郡にある。
難波の葦の亂るの序。
あり〳〵てしまひのはてに

ふもおろかなり。（新島もり）

一二　柴のいほり

このおはします處は、人はなれ、里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に、葦葺ける廊などけしきばかり、ことそぎたり。誠に柴のいほりのたゞしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。はる〳〵と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘なき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞し召して、

我こそは新島もりよおきの海の、
あらき浪かぜこゝろして吹け。

柴のいほりのたゞしばし
「いづくにも住まれずばたゞ住まであらむ、柴の庵のしばしなる世に。」（新古今集、西行法師）

二千里の外
「三五夜中新月色、二千里外故人心。」（和漢朗詠、白樂天）

隱岐には、浦よりをちのはる〳〵と霞みわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方かきつくしおもほしいづるに、行くへなき御涙のみぞとゞまらぬ。夏になりて、かやぶきの軒端に五月雨の雫いと所せきも御覽じなれぬ御心地に、さまかはりてめづらしくおぼさる。（新島もり）

一三　時頼朝臣

故時頼朝臣は康元元年に頭おろしてのち、忍びて諸國を修業しありきけり。それも國々のありさま、人の愁など委しくあなぐり見聞かむの謀にてありける。あやしのやどりに立ちよりては、その家ぬしがありさまを問ひ聞き、ことわりある愁などのうづもれたるを聞きひらきては、「我はあやしき身なれど、むかしよろしき主をもち奉りし、未だ世にやおはすると、消息奉らむ。

康元
後深草天皇の御代。

あなぐる
捜し求める。

もてまうでて、聞え給へ。」などいへば「なでふ事なき修業者の、何ばかりかは」とは思ひながら、いひあはせてその文を持ちてあづまへ行きて、しか〳〵と教へしまゝにいひて見れば、「入道殿の御消息なりけり、あなかまあなかま。」とて、ながく愁なき樣にはからひつ。（草まくら）

あなかま〳〵　あゝかしがましの意。消息を得た役人の詞。

木の丸殿　笠置の行在所をさす。

むね〳〵しき者　重だつた武士。

一四　思はぬ山のもみぢ

東の夷どもやう〳〵攻め上るよし聞ゆ。木の丸殿にはむねむねしき者もなし。いかになりゆくべきにかと、いと物心細く思しみだる。我が御心もての御事なれば、かこつ方なけれど、故郷の空もあはれにおぼしいでらる。秋も深くなりゆくまゝに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、仇のきほふかと肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心地し給ふもあぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて、
思はぬ山のもみぢをぞ見る。（むら時雨）

一五　雲霞のいきほひ

既にあづまの武士ども、雲霞のいきほひをたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじうおぼしさわぐ。もとよりいとけはしき山のつゞらをりを、えもいはず木戸、逆茂木、石弓などいふ事どもしたゝめらる。「さりともたやすくはやぶれじ。」と頼ませ給へるに、後の山より御かたきどもくづれ參りて、木戸ども燒きはらひ、おはしますあたり近く既に煙もかゝりければ、今はいかがせむにて、あやしき御姿にやつれて辿り出でさせ給ふ。（むら時雨）

一六　隱岐の國へ

遂に御門隱岐の國へ遷し奉るべしとて、彌生の初の七日に都を出でさせ給ふ。限りなく御心惱むべし。「いとかうしも人に見えじ。」と、かつは思ししづむれど、あやにくにすゝみ出づる御涙をもてかくしつゝおはします。ふりにし事を思しいづるにも、立ちかへりまた世を安く思さむ事のいと難ければ、よろづ今をとぢめにこそと思しめぐらすに、人やりならず口惜しきちぎりくはははりける前の世のみぞつきせず恨めしき。（久米のさら山）

御門　後醍醐天皇。
彌生の七日　元弘二年。
ふりにし事　後鳥羽院の隱岐に流され給ひて、そこにて、崩じ給ひしことをいふ。

一七　都の梢を

日頃は何の御にほひにもふれず、數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御別の哀れさ、なべておき所なげにぞ惑ひあへるかし。

君も御簾少しかきやりて、このもかのも御覽じ渡しつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どももしほとけげにぞ見ゆる。都の梢を隱るゝまで御覽じ送るも猶夢かとおぼゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御裝あらため、破子など參らせけれど、氣色ばかりにて參らず。これより御輿に奉まつれば、留るべき御前どもの、空しき御車を泣く〳〵やりかへるとて、くれ惑ひたる氣色いと堪へがたげなり。（久米のさら山）

しほとけ　涙に濕ひ渡ること。
鳥羽殿　山城國紀伊郡。
破子　こゝは御晝食をいふ。

一八　御道なかば

御道なかばになりぬれば、御送のものども、上下、都いでしよりもなほ花やかに今めかしうさうぞきかへたり。大方はあやしうさまことなる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々に心づかひしたる氣色などは、かうざまの御ありきと見えずいとやむご

となくなむ。さはいへど、今まで國のあるじにて世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらむ、いとねむごろにのみつかうまつれり。（久米のさら山）

いかばかりの云云　いか程の罪業によつて。

精進　精神をこめ、雜念を交へずして修業すること。

護摩　諸惡を燒き亡すといふ意で、火を焚いて佛に祈ること。

一九　隱岐の小島には

隱岐の小島には、月日ふるまゝに、いと忍びがたう思さるゝ事のみぞ數添ひげる。「いかばかりのおこたりにてかゝるうきめを見るらむ」と、前の世のみつらくおぼし知らるゝにも、「いかでその罪をも報いてむ」とおぼして、うちたえて御精進にて朝夕勤め行はせ給ふ。「法のしるしをも試みがてら」と、かつはおぼすなるべし。自ら護摩などもたかせ給ふに、いとたのもしき御事夢にも多くなむありける。（久米のさら山）

かくろへばみて云々　かくれてゐるやうなたぐひはすべて。

熊野　紀伊郡東牟婁郡

大峰、吉野　大和國吉野郡。

高野　紀伊國伊都郡。

二〇　かしこき大將軍

大塔宮の令旨（りやうし）とて、國々の兵をかたらひければ、世に恨あるものなど、こゝかしこにかくろへばみてをる限りは聚りつどひけり。宮は熊野にもおはしましけるが、大峰を傳ひて忍び〳〵吉野にも高野にもおはしまし通ひつゝ、さりぬべき隈々にはよく紛れものしたまひて、たけき御ありさまをのみ顯したまへば、いとかしこき大將軍にていますべし」とて、附從ひきこゆるものいと多くなり行きけり。（久米のさら山）

かの島　隱岐をいふ。

二一　心細き御すまひ

かの島には、春來ても猶浦風さえて浪荒く、渚の氷もとけがたき世のけしきに、いとゞおぼし結ぼるゝこと盡きせず。かすか

くんず
屈託する。

に、心細き御すまひに、年さへ隔りぬるよとあさましくおぼさる。さぶらふ人々も、暫しこそあれ、いみじうくんじにたり。（月草の花）

二二　關守のうち寢るひま

同じ月の
元弘三年閏二月

都にも猶世の中靜まりかねたるさまに聞ゆれば、よろづにおぼし慰めて、關守のうち寢るひまをのみうかゞひ給ふに、しかるべき時のいたれるにや、御垣守にさぶらふ兵どもも、御氣色をほの心えて、「靡き仕うまつらむ。」と思ふ心つきにければ、さるべき限かたらひ合はせて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。

二三　思ひたつ道

足利の治部大輔源高氏は、東を立ちし時に、うしろめたく二心あるまじきよし、おろかならず誓言のふみをしおきてけれども、底の心やいかゞあらむ、とかく聞ゆるすぢもありけり。この治部大輔高氏は古の賴義朝臣の名殘なりければ、もとのねざしはやむごとなき武士なれど、承久よりこの方、頭さし出す源氏もなくて、埋れ過ぐしながら、類廣く、勢四方に滿ちて國々に心よせの者多かれば、かやうに國の危き折をえて、思ひ立つ道もやあらむなど、したにさゞめくもしるく、「伯耆國へ向ふべし。」といひなして、まづ西山・大原わたりに一どまりして、五月七日、ほの〴〵と明くる程より、大宮の木戸どもを押開きて、二條より下、七條の大路を東ざまに、七手に分れて旗をさしつゞけて、六波羅をさして雲霞の如くたなびき入るに、更に面を向ふるものなし。（月見の花）

もとのねざし
先祖。

したに
ひそかに。

伯耆の國
この時後醍醐天皇隱岐を脫して伯耆にわたり給ふ。

西山、大原
山城國葛城郡、京都の西北。

五月七日
元弘三年。

二四　常の行幸のさまにて

六月六日
元弘三年。

うちつけ目なるべし　ふと見た目で、かやうに思はれるのであらうかとの意。

六月六日、東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし、「こぞの春いみじかりしはや。」と思ひ出づるもたとしへなく、今も御供の武士共、ありしよりはなほ幾重ともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、頼もしくめでたき御まもりかなと覺ゆるも、うちつけ目なるべし。世のならひ、時につけてうつる心なれば、皆さぞあるらし。（月見の花）

——終——

文部省檢定濟
昭和五年八月十三日

定價　金四拾五錢　昭和六年度定價　金七拾壹錢

大正八年十月廿五日發行
大正八年十二月廿七日訂正再版發行
大正十一年八月廿五日訂正三版發行
大正十一年十二月廿八日訂正四版發行
大正十五年九月八日訂正五版發行
大正十五年十一月廿日訂正六版發行
昭和四年十月二十五日訂正七版印刷
昭和四年十月二十八日訂正七版發行
昭和五年七月二十六日訂正八版印刷
昭和五年七月二十九日訂正八版發行

編者　京都市外修學院　吉澤義則
發行兼印刷者　東京市神田區表神保町二　鈴木政雄
發行者　大阪市東區博勞町五丁目　鈴木常松
發兌　東京市神田區表神保町二　修文館
大阪市東區博勞町五丁目